
未来探偵クスメギ

よねたに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来探偵クスメギ

【Nコード】

N3621Y

【作者名】

よねたに

【あらすじ】

未来を見ることが出来る大学生・久寿米木。

行く先々で事件に遭遇するが、持ち前の能力で事件が起こる前に事件を解決？

第1話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

皆さんは、友達、親、誰でもいい。

「未来を見ることが出来る」と、言われたら信じる事が出来るだろうか。

まあ、普通は出来ないだろうね。

大抵の人は「頭がおかしい」とか、そういう風に思うだろう。

ただ、僕はあえて言おう。

僕は未来を見ることが出来る　と。

そう、僕にはそんな能力がある。

正確に言えば、右眼に能力がある。

右眼で空間を見ると、1秒の間で10分先の未来までを見ることが出来る。

ただ、この能力を使うということは例えるなら、10分間の映像を1秒ずつの映像に分割して600の画面に映し出し、それを1秒間で全て見て理解するということだ。

恐ろしい情報量である。

そのため頭が割れそうな頭痛に襲われるので、滅多なことでは使わないし使いたいとも思わない。

そして普段は、眼を開いているだけでも発動してしまう能力だから、真つ黒なコンタクトレンズをはめて右の視界を奪って生活している。

ちなみに、最高でも30秒 \parallel 5時間先の未来までしか見ることが出来ない。

これ以上続けると頭が痛くて気絶しちゃうから。

それに、この能力は途中で一瞬でも眼を閉じてしまうと連続性を失ってしまう。

だから何時間も先を見るにはずっと眼を開き続けていなければならぬ。

1分とか眼を開けてられないしね。

そんな、微妙に便利そうで不便な能力を持った僕の話。

7月10日

僕は大学での講義が午前中で終わり、暇なのでとりあえずと言うことで部室へと向かっていた。

部室は大学内の通称「C棟」と呼ばれる所にある。

「C棟」は6階建ての建物で、他にもサークルやら部活やらの部室があつて多くの学生でいつもにぎわっている。

大学がコンパクトなので、移動には大して時間がかからないのがこの大学の良い所だと僕は思っている。

なので数分で目的地である部室のある5階、部室前に到着した。

僕は見慣れた部室の扉の横にかかっているサークル名の書かれたプレートを見る。

趣味研究会 と、達筆な字で書かれていた。

趣味研究会とは、その名の通り趣味を研究するサークルだ。

部員の持つている趣味をみんなで共有して、自分の趣味を増やし、なお且つ自分の経験値を増やそうではないかというのが目的である。僕はその部室の扉を開けた。

中は割と広い作りになつていて、広さは15畳程ある。

部屋の中央には長い机とパイプ椅子があり、他に部屋には、テレビ、パソコン、ソファ、本棚などの家具家電が配置されていた。

「暦、早いね。いつもは僕より後から来るのに」

中には部員である月村暦がいた。

暦とは小学校の同級生で、この大学に入った今年、再会した。

「あら、来ていたら何かまずいのかしら」

結構変わった所で、まるで小説の中の会話文みたいな喋り方をする。

僕はもう慣れた。

容姿的にも、まあこういう喋り方が似合わなくもない感じで、クールっぽい。

「いやいや、別に。ただ、珍しいなと思ってさ」

暦はいつもは僕の後から来る。

性格的にもちよっとイタズラ心みたいなものがある暦が先に来ていたら、何かあると勘ぐってしまったかもしれないだろう。

「ふーん」

そういつて、暦は先に来て付けていたテレビを見始めた。いや、再び見始めた、か。

あ、っと。

ちなみにこのサークル、部員は5人。

5人以上いないとサークルの設立申請が出来ないからね。

まあ、僕達以外の3人のうち、2人は完全な名ばかり部員で、もう1人はたまに来る幽霊部員みたいな感じ。

僕はいつもの定位置に座った。

暦の目の前に座ったが、僕は見向きもされない。

どれだけ僕に興味がないんだよ。

どうやら今日もあの幽霊部員は来そうにない。

しかたがない。

テレビでも見るか・・・。

今やっている番組は昼の情報番組のようだ。

『えーでは次のコーナー行きましょう。次のコーナーはこちら！最近の犯罪事情！』

テレビの中で司会者がはりきって喋っていた。

あれ、この番組、司会者しかないじゃないやん。

コメンテーターとかいないのかよ。

よく情報番組として成立してるな。

『この時期、誰もいない別荘地や閑静な住宅街では、空き巣被害が多発しているそうです。と、言う訳で今日のテーマは空き巣です。』

そして、今日は特別に空き巣犯罪に詳しい方を呼んでいます。どうぞ！』

カメラが切り替わって別の人を映し出した。

どうやら今日のゲストのようだ。

『空き巣は強盗や殺人などと比べれば軽い犯罪に見えますが、立派な犯罪行為です。しかも、人がいない間を狙って物を盗むなんて卑劣です。同じ人間としてとても恥ずかしく思います』

まあ、空き巣は悪いことだね。

『と、言う訳でお呼びしました。元空き巣常習犯のオオクラさんです』

おいしう。

『よろしくお願いします』

『よろしくお願ひします。最初のセリフ、ご自身の過去を全否定ですね』

本当にそうだよ。

元空き巣が空き巣を卑劣で人間として恥ずかしいとか何を言ってるんだよって話だよ。

『ええ、まあ（照）』

誰も褒めてないし。

あーって言うか、テレビに心の中とはいえ突っ込む僕ってもう、なんだよ！これ！

『照れる所じゃありませんよ』

司会者律儀に突っ込むな！。

『では、さっそくですが、空き巣の手口について司会のミシマさんに説明してもらいましょう』

なんでやねん。

『出来ればオオクラさんに説明していただけるとありがたいですね』

『あ、そうですね。では、どんな家が空き巣に入り易いか、私が現地に飛んでVTRを作ってきましたのでご覧ください』

手際いいな。

『飛んではいませんよね』

画面が変わりVTRが始まった。
場所は閑静な住宅街のようだ。

『えー私は今、軽井沢の別荘地に来ています。では、歩きながら入り易い家を探していきましょー』

画面の右上にワイプで司会者の顔が映る。

暫くの間、カメラマンと思しき男とのどうでもいい会話が続く。
そしてようやく本題に入った。

長いよ、ここまでで5分はかかってるよ。

『私の経験上ですね、煙突のある家が入り易いですね』

『サンタですか』

ワイプで司会者が突っ込んだ。

それ以前に煙突のある家なんてそうそうないからね。

『あとは子供のいる家ですかね。冬に赤い服着て「メリークリスマスー」。ふおっふおっふおー」とか言えば入れてくれますし』

『だからサンタですか』

現代っ子は入れてくれはしねえよ。
悲しき現実ってね。

『絶対に入りたくない家とがありますか（カメラマン）』

『そうですね……。全面ガラス張りのシースルーハウスとか』

『どこにあるんですかね、そんな家。プライバシーも何もあつたもんじゃありませんね』

全くもってその通りだね、司会者さん。

『あとは、刑務所ですかね（笑）もう二度と住みたくない集合住宅ですね』

『……………』

集合住宅で。

まあ、そう言えなくもないけど。

『そろそろTVの前のみなさんが説明に飽きてこられた頃だと思えますので、ちよつと実際に空き巣に入ってみよう！』

だめだろ！

『急に教育番組みたいにフランクにならないでください。あと、入っちゃだめです』

。ばりん。かちゃかちゃ。たっ たっ たた……。すたこらすたこら。

そして数分後……。

『と、言う訳で、あのような家は簡単に空き巣に入れちゃいます』

手際良過ぎだろ。

現役だろ、オオクラさん！

ブランクを全く感じさせない手さばきだよ！

『入っちゃいましたねー』

うーうーうー（パトカーのサイレン）

『なんか警察来ましたね。ひょっとしてオオクラさん捕まっちゃったんですか？』

だろうね。

証拠の映像も残ってるし。

ここに。

VTRの中でパトカーから女性警察官が降りて来た。

『空き巣の現行犯で逮捕します（女性警察官）』

『あー連れてかれちゃってますね』

女性警察官によって手錠を掛けられたオオクラはパトカーに乗せられた。

十数分後……。

『え、オオクラさん釈放されたんですか？』

何してるんだよ日本警察！

オオクラがパトカーから降りて来た。

そしてパトカーは走り去って行った。

『どうやって釈放されたんですか（カメラマン）』

『あの女性警察官の心の中には誰もいなかったの、ハートを盗んじやいました』

あの警察官には彼氏とかいなかったから、上手く言いくるめてってことか。

そしてVTRが終わった。

『それほど上手い事言えてませんでしたね。ではここからは、元空き巣常習犯のオオクラさんに質問していきましょう』

『どうぞ。なんでも聞いて下さい』

『空き巣はどれくらいやられていたんですか？』

まあ妥当な質問。

『そんなに長いあいだではないですよ。高校の時に始めて、高校生で4年間、大学生で7年間・・・なので11年間ですね』

長い学生生活！

『いろいろと長いですね、空き巣だけじゃなく。ちなみにどれくらいの数のお宅に空き巣に入られたんですか？』

『そうですね・・・まあ1日4時間の週3回だったので、だいたい

1300件くらいですかね』

『そんなバイト感覚でやらないでください。というか1300ですか。合計すると幾らくらい盗んだんですか?』

『一軒当たり30万って言う所ですね』

『じゃあ、単純計算で3億9千万ですね・・・て、3億9千万!? そのお金どうしたんですか!?!』

『貯金しました』

『真面目な小学生ですか』

そんな訳の分からない番組を見ながら心の中で突っ込みをしていると、

「ねえ」

と、暦が話しかけて来た。

何かを企んでいるらしい。

表情で解る。

声質で解る。

めっちゃこわい。

経験上、暦の「ねえ」に関わって来て良い事なんて一つも無かった。一体今回は何をさせられるんだ・・・。
とりあえず僕は答える。

「な、なにか」

ちよつとどもつてしまった。

「私ね、旅行が趣味なのよ」

聞いたことないぞそんなこと。

「初耳だね」

「そうね。言っていないもの」

「あ、喉乾いたな。お茶でも飲もう（棒読み）」

とにかくなんか面倒な事になりそうだ。

この場から離れよう。

作戦名「ちよつと飲み物を買いに外出てくる」！

「旅行へ行きましょう」

無駄な抵抗だったか。

曆は僕の「ちよつと飲み物を買いに外出てくる」作戦を無視した。仕方ないので話に乗っかる。

「・・・まぢで?」

「ええ、マジよ」

うわー！そう来たか！

さっきのテレビで軽井沢とか言っていたからか!?

それで旅行行きたくなっただってか？
ホントやだわー！

「・・・どこ行くの？」

「京都よ」

「は？」

そんな定番中の定番、京都？
んなあほな。

曆なら「オーロラを見にグリーンランドへ」とか言いそうなのに！

「・・・良いんじゃないかな？京都」

「じゃあ、私は帰るわ」

「え、なんで？」

「家で予定を立てるから。あ、あとあなたは新幹線のチケットをよろしく」

「予定立ってないのに!？」

「行く日は決めてあるわ。8月4日よ。だからその日の午前中のチケットを2枚取っておいて頂戴」

「8月4日って夏休み初日じゃん・・・っていうかチケット2枚で良いの？一応部員5人いるんだけど」

「いいわ。5人と言っても2人は名ばかりで1人は私、嫌いだから」

あーそういえば、あいつとは仲悪かったな・・・。

「いいのかよ、後でいろいろ言われるんじゃないの？」

「そういう所が嫌いなよね」

「じゃあ、呼べば？いろいろ言われなくて済むし」

「嫌よ。嫌いだから」

「もういいよ」

「あらそう」

と、言う訳でこの日はお開きとなった。

なんだかんだあつて8月4日。
旅行当日。

東京駅のホームにて。

(新幹線内の清掃で待ってる)

「そういえば久寿米木くん、ここまで来て言うのもアレだけれど、忘れ物はないかしら」

「本当にここまで来てって内容だな。ないよ、っていうか暦は僕の親か！忘れ物の事わざわざ心配しなくていいよー！」

「あら、ごめんなさい。気を悪くしたのなら謝るわ。ごめんなさい。もうしないわ。本当に申し訳ないと思っっているから殴らないで」

「いや、そこまで卑屈に謝らなくても・・・いいよ、気にしてないから」

「あらそう。じゃあ行きましょう、クズ。新幹線のドアが開いたわ」

「おいこらさらっと流すな。今、僕のことクズって言った？」

「うるさいわね。口を糸で縫いつけるわよ」

「だからって本当に針と糸を出すな！何で持つてる！」

「黙る気がない様ね」

「・・・」

「いい子ね」

こうして僕達は新幹線へと乗り込み京都へと向かった。

新幹線の中には、そこそこの人が乗り合わせていた。

まあ、夏休みだからこれくらいは普通か。

僕達の席は車両の真ん中あたりの右列で、曆は窓側、僕は通路側、曆の左側に座った。

この辺でもよく力関係が如実に出るな・・・。

同じ年齢なのに・・・。

「そういえば久寿米木くん。未来が見えるのだったわよね。それで

普段はコンタクトレンズをしているのだったかしら」

席に着くなり、そんなことを言ってきた。
え、何で知ってるの？

誰にも言っていないはずだけど……。

いや、まで。

そういえば昔。

「何を驚いているのかしら、久寿米木くん。いえ、今まで何となく
恥ずかしくて言えなかったけれど昔みたいに春希くんと呼んだ方が
いいかしら」

うわ！

なんか恥ずかしいな。

「いや、名字で呼んでくれていいよ。そんなことより、なんで眼の
事を」

「久寿米木くんが教えてくれたのよ。確か　そうね、小学2年生
の頃だったかしら。私の嫌いなあの人　雨倉さんと一緒に」

「あ……あ　そういえば」

『間もなく発車致します……』

そして僕は新幹線の発車と共に、昔のことを思い出していた。

回想

僕がこの未来を見る能力に目覚めたのは、小学1年生のときだった。

場所は確か家の自室だった。
はつきり言つて最初は驚いた。

目の前の光景がありえない速さで進んでいくのだから。

そして僕はもの凄い頭痛に襲われて気絶した。

次に気がついたとき僕はまた、ありえない速さで進んでいく世界の中だった。

それもそうだ。

右眼を開けてしまっているのだから。

僕の右眼は開いていると無条件で発動してしまうものだから当然。

それに僕は気がついて慌てて右眼を閉じた。

なんとか頭痛が収まったが、一体僕の体に何が起こったのか全く理解できなかつた。

でも気が付いた。

数分した後、さっき見たことが現実起こったからだ。

その時見たのが、棚から本が一冊落ちる映像で、それが数分後に起こった。

これはもしかして、と思つた。

僕は未来が見えるのではないかと。

はつきりいつて、嬉しかつた。

人には出来ない事が僕には出来る。

ヒーローにでもなつた気分だつた。

正体を隠してこの力を使い、人を助けて、それがニュースになつて

そんなことが頭を駆け巡つた。

正体を隠す。

ヒーローだつたら当たり前。

でも、やっぱり誰かに言いたい。

この能力のことを誰かに言いたい。

だから僕は親に言ったよ。

「僕、未来が見えるんだ」って。

そして褒めて欲しかった。

褒めて欲しかったのだと今となつては思う。

「すごいね」と言つて欲しかったのだと思う。

最初は親も信じなかった。

だから僕は信じられないくらいの頭痛に耐えて未来を見て証明した。

未来が見えるつてことを。

褒めて欲しくて。

でも、それは間違いだつた。

人は、自分と異なる人 普通の人と異なる人に対してどこまでも

冷たく、非情になれる。

それが例え、親と子供だつたとしても。

親は僕を冷ややかな目で見た。

子供を見る 今までの眼とは違った。

今でもあの眼を覚えている。

とても嫌な、あの眼を。

僕は親に捨てられた。

それからというものの、親戚の家を転々とした。

そして、僕は出会つた。

月村暦と雨倉しずかに。

当時の僕は人に迷惑をかけないよう生きていた。

二度と捨てられないように、と。

そういう思いがあつたから。

だから、捨てられて以来、誰にも自分の眼のことを言わなかつた。

そして、なるべく社会的に振舞つていた。

人といるとき、自分もみんなと同じ普通の人なんだと感じられたから。

二度と親に見られたような眼で見られなくなかつた。

そんな時、特に仲が良かったのが暦としずかだった。家も近所だったということもあって、よく遊んだ。

それが小学2年生のときだった。

それでも僕は誰かに自分の眼のことを話したいという衝動に駆られた。

誰かに話して僕のことを分かってくれたい欲しかった。

そして、話してしまった。

暦としずかに 眼のことを。

幾ら小学生と言ってもそんな突拍子もないことを簡単に信じたりはしなかった。

だから、僕は使った。

右眼を。

親に話した時のように。

すると暦としずかは 笑ってくれた。

「すごいね」と言ってくれた。

キラキラとした眼を僕に向けてくれた。

僕は始めて理解者を得た。

こうして僕達3人は友達であり、秘密を共有する仲間となった。

そして去年、再会した。

回想終了

「うん、思い出した。そういえば話した」

今となつては、右眼のことを話すと、その話が漏れてどこかの研究機関に拉致されるんじゃないかとか、いろいろ思う所があり話さなくなつたが、当時はとにかく理解者が 自分の苦しみを分かってくれる人が欲しくて話してしまった。

「一応言っておくけれど、私は誰にもあなたのことを話していないから安心して頂戴。雨倉さんの方は知らないけれど」

いろいろと意図をくんでくれたらしい。

「ああ、ありがとう。それにしてもよく覚えていたね」

「普通は忘れられるものじゃないわよ」

まあ、そりゃそうか。

僕みたいなのがそこら辺をうろつろつしている訳ないか。

「で、その話がどうしたの」

そうだ。

なんで急にその話をしたのかが問題だよ。
今話さなくても、ねえ。

「だから、そのせいで、右眼にコンタクトを入れて視えないようにしているのよね」

「ああ、そうじゃないと生活できないから」

僕の右眼は開いていると、自分の意志とか一切関係なく未来を見
てしまう。

そしてそのたびに頭痛が襲う。
そんな生活してられない。

「私が右に居ると顔をみて話せないでしょうから席を変えましょう」

という話をしたかったのよ」

「なるほど。曆ってそんな心配りが出来たのか」

「殺すわよ」

打てば響くタイミングで言われたのでめちゃくちゃ怖い。

「ごめんなさい。．．．でも、いいよ。気持ちだけ受け取っておくよ。もう慣れたから」

「わかったわ。久寿米木くんがそれでいいというなら私もこれ以上言わないわ」

この後、僕達は寝てしまい気が付くといつの間にか京都だった。

**第1話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまつものと言つても過言ではないのだ
ども、よねたにです。**

初投稿です。

つたない文章で、すみません。

評価とかいただければ、参考にさせていただきます。

第2話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

「いやー京都ついたねー」

「ええ、新幹線は早いわね。昔、夜行バスで来たことがあるのだけれど、8時間かかったわ。それを思うと恐ろしく速いわね、新幹線は」

現在の時刻は昼過ぎ。

いつの間にか寝てしまって、結構慌ただしく新幹線を降りて・・・で、今だ。

「そつえばさ」

「なにかしら」

今まで気になって何回か聞いたけど、ずっとはぐらかされちゃってたけど、さすがに現地に到着したし、聞いてもいいよね。

「どこに泊まるの？日帰りじゃないって聞いてるけど」

「ああ、今までねちねちと聞いてきたその質問ね」

嫌な言い方をするじゃあないか。

もう慣れたけどさ。

・・・慣れたってなんだよ！

あー！自分に自分で突っ込むとか末期症状だよ、もう。

「どこか旅館なりホテルなり予約したの？」

「してないわよ、そんなもの」

「予約したの？」の「予約し」あたりでかぶせて来た。

「は？」

意味が分からない。

・・・ああ、友達がこっちにいてその家に厄介になるとか？

高校の時の友達がこっちの大学に来ていて、一人暮らししています
みたいなの。

「友達の家とかに泊まるってこと？」

「友達？誰よそれ」

「えー」

「えー」だよ。

それ「えー」だよ。

じゃあ、どうするんよ本当に！

「現地調達よ。これが旅の醍醐味ね」

何を考えているんだよ！

夏休みだよ！？

人いっぱいいるんだよ！？

もし宿が取れなかったらどうするんだよ！

「・・・じゃあとりあえず、泊まるとこ、探そう」

「そうね」

この後、本来なら京都タワーや東寺の五重塔やらを見て回るはずだったが、とんだコーディネーターのせいで当然のごとく潰れた。

そして、午後6時。

「ええ、1部屋なら今すぐに準備が出来ますがいかがなさいますか？」

駅からかなり離れた薄暗い路地に面したしなびた旅館に行き着いた。

駅周辺のホテルは夏休みということもありどこも一杯だった。

「どうするよ」

とりあえず暦に聞く。

「まあ、仕方ないわね。では、お願いします」

と言う訳で、今夜の宿決定。

旅館の名前「旅館・はなこ」。

なんか・・・こう・・・こわいなあ・・・。

トイレが行けなくなるような怖さがある。

「ごめんなさいね」

と、唐突に暦が言った。

え、なにこれ。

暦が突然謝るなんて・・・。

まさか、呪い？

「せめて一言言っておくべきだったかしらね。驚かせてしまった」「めんなさい」

ああ、そういうことか。

旅館の現地調達についての謝罪か。
心臓に悪いな、この旅館は。
全くもう、はなこさんめ！

「ああ、いいよ別に。ちゃんと宿が取れたことだし、気にしてないから」

「あ、そう」

そんなことを話していると、後ろから声をかけられた。

「お部屋の準備が整いました。どうぞ、こちらへ・・・」

小さな老婆が立っていた。

あつぶないなー。

叫びそうになっちゃったよ。

僕達は老婆の後に付いて行き、部屋へ到着した。

「どうぞ、ごゆるりとおくつろぎください」

そう言っって老婆は去って行った。

「部屋は・・・まあまあね」

部屋は2部屋になっていて襖で仕切ることが出来るようになっていた。

広さはそれぞれ6畳と8畳程の和室。

6畳の部屋は出入り口と接していて、旅館っぽい机が1つと壁に掛け軸。

8畳の部屋は奥にあり、小さな冷蔵庫と金庫とブラウン管の年季の入ったテレビが置いてある。

ちなみに部屋は1階である。

「まあ、2人で使う分には問題なさそうだね」

そういいながらさりげなく掛け軸に手を伸ばした。
そして、ぺらっとめくる。

「・・・」

戻した。

「ね、ねえ」

自分でも声が震えるのが解る。
そんな声で曆を呼ぶ。

「なにかしら」

奥の8畳の部屋から曆が来る。

「ちよーっとさ、掛け軸の裏見てみて」

「なん」

「いいから」

有無を言わず僕は言った。

僕は見てしまった。

もうやだ、帰りたい！

「全く我儘ね」

そんなことを言いながら、暦は掛け軸をめくる。
そして戻した。

「・・・まあ、ありがちな」

「ありがちな、じゃなくてさー！」

なんでこの人はこんなに冷静でいられるの!?

僕がおかしいの？
だって

「お札がびっしり何枚も貼ってあるなんておかしいでしょーが！」

そう、お札が何枚も貼られていた。

「だから、ありがちなって言ったでしょ」

あくまでも冷静に言う暦。

取り乱している僕がバカみたいじゃないか！

「だって悪霊退散とか書いてあるし！あんなの現実にあるなんて信

じられない!」

「うるさいわね。舌を千切るわよ」

なんでよ!

これは正当な理由があつて騒いでいるんだよ!

「一回外に出て落ち付いてきなさい。さっき聞いたのだけれど、この部屋の外は庭になっていて、自由に使つていいそうよ」

「・・・わかつたよ」

そつだ、確かに騒ぎすぎたかもしれない。

ちよつと頭を冷やそつ。

そつだよ、霊なんているはずがない。
いるはずがないんだよ。

そつ言つて、僕は窓から庭に出る。

庭にはサンダルが置いてあつたのでそれを履いて軽くうろつろする。

「ふつ」

確かに落ち着いていた。

夏の夜風が気持ちいい。

庭には松の木やら小さな池やらがあつて小さいながらも日本庭園のようになつていて風情がある。

それにあの古びた井戸なんかも・・・。

井戸?

日本庭園に井戸?古びた?

僕の頭の中でその井戸と部屋にあつたブラウン管テレビが一瞬繋がる。

まっさかー・・・。

だだだだだだだだだだ・・・がらっ！

僕は走って部屋に戻った。

「ね、ねえ・・・はあ・・・はあ・・・」

「あら、どうしたのかしら」

曆は掛け軸のお札をはがしていた。

それはもう丁寧に。

一枚一枚。

「なんで剥がしてるんさ！」

僕は慌てて部屋の中へ上がる。

「だって、久寿米木くんがお札が気になるって言うっていたから、剥がしているのよ。気遣いと優しさよ」

「だめでしょ剥がしちゃ！」

曆の気遣いと優しさが怖い。

「そんなことよりどうしたの、久寿米木くん」

「そんなことって・・・。もういいよ。そう、井戸。井戸があったんだよ！」

「だから？」

お札を剥がす手を止めずに聞いてくる曆。
その手、止めようよ……。

「もういいや。……はなこにさだこ……もうやだこの旅館……

」

今夜は眠れそうにない。

「ふう、やっと剥がし終わったわ」

お札をすべてはがし終わった曆は満足感溢れる表情だった。
と、そのとき

コンコン

ビクウ！

なんだ……ノックの音が。
焦った！

「はい」

曆が出る。

どうやら仲居さんのようだ。

悪霊の類じゃないようなので僕も入口へ。

うん、仲居さんだ。

それも結構美人さんだ。

仲居さんと言ったら大人っぽいみたいないメージがあったが、この

人はかわいらしい感じた。
まだ、なんとなく幼さが残っている。
若いのかな。
あ、こっちみた。

にこっ

笑ったー！

仲居さんが僕に笑いかけてくれた！
僕はネームプレートをみる。

「中井」

仲居の中井さんが。

天職だな。

「お食事のご用意が出来ました」

どうやら食事らしい。

「わかりました。運んでください」

暦がそういうと、中井さんは食事を運び始めた。

中井さんが僕の横を通るたびに甘いフローラル系の良い匂いがする。
幸せだ……。

そして数分後。

「ではごゆっくり」

「ありがとうございます」

僕が言つと、

にこっ

また笑つたー！

めっさタイプだ！

この旅館来てよかつたー！

と、暦がなんか睨んでいる。

ああ、早く席に付けということか。

テーブルの上にはそれなりの料理が並んでいた。

「私、あの中井さん嫌いね」

「え、どうしてさ。優しい感じのよさげな人だったじゃないか」

「旅館で香水はタブーでしょ」

「いいんじゃない？かわいいからさ」

「・・・」

「なにかな」

「いいえ別に。じゃあ、いただきますしょうか」

「そうだね」

料理はもちろん和食だった。

刺身やら活造りやら揚げ物やらとかなり豪勢だった。

こんな辺鄙な旅館でも出て来た料理に罪はない。

僕達はいただいた。

めっさおいしかった。

「もうこんな時間なのね」

食事をし終え、時間を確認した暦が言った。

ついでに僕も時間を確認する。

9時になっていた。

「まあ、しょうがないんじゃないかな。いろいろあったし」

宿探し、とは言わずにぼかす僕。

こうというのが気遣いと優しさなんだよ。

貼ってあるお札剥がしちゃうとかじゃなくて。

「そうね。では、私はこれから露天風呂へ行こうと思うのだけれど」

そんなものがこのしなびた宿にはあるのか。

初耳だ。

「へーそんなものがあるんだ」

「ええ、これもさっき聞いたのだけれどね。久寿米木くんはどうするのかしら」

「うーん。じゃあ、僕も行こうかな。折角露天風呂があるらしいしね」

「そう。じゃあ行きましょうか」

と言う訳で、食後の風呂へ。

僕達は脱衣所の前まで一緒に行きそこで別れた。

脱衣所を見る限り誰もいないようだ。

そしてぱっぱと服を脱ぎ、今日一日の疲れを癒すために浴場へと向かう。

「へーこれはなかなか」

扉を開けると、なかなか立派な露天風呂だった。

僕は身体をシャワーで流して湯船へ向かう。

「ふう」

ちやぷんという音と共に湯船へつかる。

空を見上げると雲ひとつない。

そして、夏にも関わらず星がきれいに見えた。

「たまにはいいね、こういうのも」

「そうね。なかなか風流ね」

僕のつぶやきに返事があった。

あれ、誰もいないはずなのに。

それから女の人の声みただったぞ？

さらにその声はどこかで聞いたような声だったぞ？

おかしいな、幻聴か？

「幻聴ではないわよ」

露天風呂の入口に背を向けていた僕は、恐る恐る振り返る。そこには見知った顔があった。というか、曆だった。

「心を読むなよ。っていうか何でここに？ここは男湯だぞ？」

そういいながら僕は腰にタオルを巻く。本来湯船の中でのタオル着用は厳禁だが。

「脱衣所が分かれているだけで露天風呂は混浴よ」

なんてこったパンナコッタ！

「いくら夏でも裸で外に居ると少し寒いんだけど」

「え？」

「入ってもいいかしら」

「あ、ああどうぞ」

「では失礼」

そういつて曆は湯船へ入って来た。つて！

僕のバカ！

今更ながら気付いたが曆は女じゃないか！なに一緒に入っちゃってるんだ！

改めて意識してしまった僕はまともに曆を見れなくなってしまっ

た。

「あら、どうかしたのかしら久寿米木くん」

「いや、なんにもないよ！」

声が裏返った。

ちらりと暦を見る。

太ってもいないし痩せ過ぎでも無い健康的な身体。
細くてしなやかな手足。

背中まである髪を括ってあらわになっているうなじ。
そして、タオル越しにでもわかる胸。

「どこを見ているのかしら」

暦が突然話しかけて来た。

「どこも見えてないよ！」

慌てて視線を反らす。

そしてまた声が裏返った。

もう心臓がヤバいことになっている。

もう上がろう。

全然くつろげなかったけど。

「あーそろそろ上がろうかな」

「まだ入ったばかりじゃないの。5分も経っていないわよ」

ばれていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「そういえば、ここの宿、他のお客さんとかいないの？」

間が持たず聞いてみた。

「聞いていなかったの、久寿米木くん。受付で1部屋しか取れないと言っていたじゃない。他のお曲さんもいるに決まっているでしょう」

「あ、そつか。じゃあ、どれくらいいるのかな」

こんな怪しげな宿に来る人の気がしれない。

・・・人のことを言える立場じゃないけどさ。

「この旅館には客室は5つしかないそうよ。だから私達以外には最低でも4人、多くても16人っていうところかしらね」

「なるほどね」

「あとは従業員ね。確か今日いるのはあの女将さんと中井さんが2人、それから料理長が1人と料理人2人と言っていたかしら」

このとき僕は、暦のいた「中井さんが2人」を「仲居さんが2人」と勘違いしていた。

まあ普通しちゃうよね。

そして、このことが後々面倒な事になる。

「なんでこの旅館に精通しているのか聞きたいところだけど、女将さんって？そんな人いたっけ」

そんな美人な人いたっけか。

「何を言っているのかしら。部屋まで案内してくれたじゃない」

あーあのよぼよぼの恐ろしげな老婆のことか！

女将さんって言うから美人さんを想像したじゃないか。

女将は美人と相場が決まっているのに。
と、ここで

「久寿米木くん、私も聞いていいかしら」

曆は前置きをしながら聞いて来た。

一体何を聞くつもりなのやら。

「なになかな」

「私は、小学生の間と、ここ数カ月の間しかあなたのことを知らないのだけれど、その間、私の知る限りあなたの持っている能力を使っている所を見たことがないのよ。私に　私達に証明したとき以外ね。その能力を使えば、競馬や宝くじやロトなんかで幾らでも稼ぐことが出来るのではないかしら。どうやら私の見た所普通の金銭感覚のようだし。どうしてかしら」

「ああ、そんなことか。ちょっと身構えちゃったよ」

なるほど。

確かに暦の言うとおりだ。

未来が解るのなら競馬で万馬券を当てることや、ロトで当選番号を知ることだって出来ない訳はない。カジノに行けばぼろ儲け出来る。

「暦だったらどうする?」

「え?」

逆に聞いてみた。

「暦が僕的能力を持っていたとしたらどうする?」

「そうね。客観的にみたら使いそうだと思って聞いてみたものだけれど・・・いざ自分がとなると・・・わからないわね」

「どうしてさ。お金欲しくないの?」

「お金は欲しいわ。欲しいに決まっているじゃない」

がつつき過ぎだよ。

「だろっね」

お金があることに越したことはない。

ただ、僕は未来を見てまで欲しいとは思わない。
なぜなら

「でも・・・よく考えてみると、つまらないわね」

「と、言つと」

「だって、働いてもいないのに一生楽に暮らせるって、やることがないじゃない。何をしたらいいのよ。一生遊んで暮せてこと？冗談じゃない。私はそんな生活すぐに飽きるわ」

「なるほどね。僕もそう思うよ」

そう、先が解ることは 解ってしまうことはつまらないのだ。自分の思い通りになりすぎる。

やはり、ある程度のスリルは人生の中に必要不可欠だ。僕はそう思っている。

「まあ、それ以前に」

簡単な事だ。

「頭痛は嫌だろ」

「納得の理由ね」

こうして僕達はまた少し知りあうことが出来た。そして夜は更けて行った。

場所は変わって部屋へ。

「明日のことなのだけれど」

唐突に暦が話しかけて来た。

僕は寝るために右眼のコンタクトを外そうとしていた。

「ん？」

「今日行けなかった京都タワーと五重塔、明日行ってみないかしら。もちろん明日回る分は明日行くから、少し慌ただしくなると思うのだけれど」

あーなるほど。

「いいんじゃないかな。折角京都まで来たことだし。ところで明日は何処へ行く予定なのか聞いてもいい？」

「明日は二条城と金閣寺と龍安寺に行こうと思っているわ」

「これはまた有名どころだね」

「だめかしら」

「いいんじゃない？」

マイナーな所ばかり行かれてもつまらないだろうしね。

そう思いながら僕は右眼のコンタクトを外す。

コンタクトを外すときは楽だ。

外した瞬間に眼を閉じればいいだけだから。

問題はコンタクトを入れる時だ。

どうしても裸眼の状態では眼を開けなければならない。

この時が1日の中で最も辛い。

僕は右眼を閉じながらコンタクトをケースにしまう。

「へーいつもそんな風にやっているのね」

暦が僕のことを興味深く観察していた。

「まあね」

そして、仕上げに眼帯を右眼に付ける。

「なるほどね。そうすれば意識して右眼を閉じる必要もないものね」

感心された。

「未来を見れる能力者さんの眼帯だからもつと物々しい物を想像したのだけれど・・・案外普通ね」

「悪かったね、普通で」

僕が付けている眼帯は市販されている白いガーゼのヤツだ。

こう、革張りで黒くて 海賊がしているようなものではない。

僕はふと時間を確認する。

現在時刻 11時。

「まだ寝るには少し早いか。・・・ちよつと飲み物買って来る。暦は何か飲む?」

一応確認。

「じゃあ、お茶を貰おうかしら」

「了解」

そういつて僕が外に出ようと扉を開けると、

「あ……」

「え？」

目の前には仲居の中井さんがいた。

「え……あ……し、失礼しました！」

そう言つて中井さんは立ち去つて行つた。

「……あれ？匂いが……変わった？風呂でも入つたのかな」

食事を運んで来た時の中井さんの匂いはフローラル系の甘い香りだったが、今の中井さんの匂いは柑橘系のさっぱりした匂いだった。

「にしてもかわいいわー」

最近、普段ずっとクールで毒々しい暦といるからか、かわいい人を見るとどうしても目が行つてしまう。

「どうかしたのかしら」

後ろから暦に声をかけられる。

まあ、入口に突っ立っていればそりゃあね。

「いや、なんでもないよ。じゃあ、お茶だったよね？買って来るから」

そう言って僕は部屋を出た。

てくてくてくてく

旅館内を数分歩くと自動販売機が見つかった。

「あつたあつた。確か曆がお茶で・・・僕はどうしようかな・・・
高尾山の天然水でいいか」

購入。

「・・・戻るか」

そう言って、戻ろうとすると前から人がやって来た。

「あ・・・」

「あ・・・」

中井さんだ。

しかも・・・2人？

「え・・・え？」

どうなってんのこれ。
ちよっと訳が解らない。

「どうかなさいましたか？」

中井さんが声をかけて来た。

「玲ちゃん、多分・・・」

「え？・・・ああ！すみません、私達姉妹なんです」

「へ？」

「と、言う訳で私は中井玲といます。一応姉です」

「私は中井理佳です。玲の妹です」

「あー姉妹だったんですか」

場所は1階の受付前。

僕は混乱した頭を整理した。

？この旅館の仲居さんは姉妹でした。

？名前を玲さん（姉）と理佳さん（妹）といます。

？玲さんは25歳で普段はとある研究所で働いていて、夏休みということで帰省して実家であるこの旅館の手伝いをしている。

？理佳さんは20歳の大学2年生で、こちらも普段は東京の大学に通っているが帰省して実家のこの旅館を手伝っている。

？顔は姉妹にも拘らず瓜二つで僕には見分けがつかない。ただ、匂いが違って、姉の玲さんは柑橘系の匂い。妹の理佳さんはフローラル系の匂い。

？どちらもかわいい。

なるほどね。

来るときドアの前であったのは玲さんの方か。で、食事を持ってきてくれたのが理佳さんか。

「それにしても、よく似てますね」

本当によく似ていて、全く見分けがつかない。僕の言葉に理佳さんが答える。

「よく言われます。ただ性格はかなり違うんですよ?」

「そうなんですか?」

「ええ。私なんかは割とドジとかやつちゃうんですけど、玲ちゃんはそういうの全くなくていつも完璧なんです」

そういつて理佳さんは玲さんを羨ましそうに見る。

「そんなことないわよ。私は理佳ちゃんの落ち着いた性格とかすごく羨ましいわ。私は落ち着きがなくて、だめよ」

今度は玲さんが理佳さんを羨ましそうに見る。

「えーそう?私からしたら玲ちゃんのアクティブなことかすっごく羨ましいわ。玲ちゃん運動とか物凄く得意で。私はそういうの全く。確か玲ちゃん空手とか柔道とかかなり凄かったよね。大会で優勝とかしてたしね」

「勉強は理佳の方が出来たじゃない」

「でも玲ちゃん今では研究所勤務でしょ？」

なんか褒め合いになって来た。
そろそろ止めよう。

「お二人とも仲が良いんですね」

「そうですか？普通ですよ。ね、玲ちゃん」

「そうよ、どこの姉妹、兄弟でもこんな感じですよ」

そう2人は言った。

一人っ子の僕には、2人の関係がとても眩しく見えた。

「ただいま」

部屋に戻って来た。

「お帰りなさい。随分と遅かったわね」

あーなんか機嫌が悪そうだなー。

「ま、まあね。はいお茶」

そういつて僕はお茶を曆に手渡す。

現在の時刻11時30分。

自動販売機に飲み物を買いに出かけるだけで30分の時間を労して

しまった。

「ありがとう」

僕が手渡したお茶を開け、早速飲みはじめた。

「さて」

飲んだお茶をテーブルに置いて、改まった声で言った。

「ちよつと正座して頂戴」

「なん」

「口答えは反抗とみなします」

「・・・わかりました」

しづしづ正座する僕。

座布団くらいは欲しかった。

畳に直正座は長くは持ちそうにない。

「なんでこんなにも時間がかかったのかしら。たかが旅館内の自動販売機に飲み物を買うに行くだけというものでしょう。久寿米木くん、あなたお遣いにも行った事がないのかしら。よければ私が直々に「初めてのおつかい」という全国の番組にハガキで応募してあげてもいいのよ？それともなにかしら。大学生にもなってお金の使い方が解らなかったのかしら。それなら私が謝るわ。ごめんなさい。あなたのクズで無能な脳みそを理解しきれていなかったのだから。さあ、どっちだったのかしら？お遣いが初めてだったのかそれとも

お金の使い方が解らなかつたのか。早く答えて頂戴。私は短気な
よ。というか私は久寿米木くんにお茶を頼んで30分も待たされて
いるのだから、あなたを殺したくてもううずうずしているところな
のだけれどね」

・・・こっわー！

なに、殺したくてうずうずしているって！

本気か？

これはひょっとして右眼を使って僕の未来を見るべきなのだろうか。
それくらいの命の危機なのだろうか！

こうして、僕は命に危機を感じながら、京都旅行1日目を終えた。
ちなみにこのあと、寝たのは深夜3時を過ぎた頃だった。

あと、足が痺れてのたうちまわった。

第2話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだが、
第2話です。

次の話で事件らしい事件が起こる予定です。

まだまだ粗い文章で読みにくいとは思いますが、
読んでもらえるとうれしいです。

第3話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

8月5日。

京都旅行2日目。

朝。

「あー寝不足じゃーいぼけーい」

あー頭が回らない寝足りない瞼が重い！

今何時だよ・・・7時か。

これは起きにやまずいな。

確か朝食が7時からこの部屋に運ばれてきて、で

「久寿米木くん、今起きたのかしら。随分とお寝坊さんね」

そういつて曆は僕の頭の上で腕を組みながらくつくつと笑っていた。
忌々しいな、このつ。

「あと3分待つて。朝食はちよつと待つてもらってさ」

あまりにも眠いので曆に反抗してみる。

「あーなるほど。わかつたわ、久寿米木くん。私、その辺も理解しているつもりだから」

「・・・なんのこつ？」

布団の中から曆に聞く。

あー布団最高。

「3分もあれば朝勃ちも治まるわよねってことよ」

！！

「うーん眠気が吹っ飛んだね、今の発言でさー！」

眠気すつきり気分最悪。

「あらそう。お役に立てて良かったわ。あ、別に今の「立てて」の部分に変な意味はないから安心して」

「僕はそんな所まで意識していなかったよ・・・」

暦の下発言のお陰で目が覚めた僕は、とりあえず布団を片付ける。そしてふと疑問を持った。

「そっいえば暦さ」

「なにかしら」

受付に電話して食事を持って来てもらおう頼み終わった暦が振り向く。

「一体何泊するのかな」

今までこの質問をしてこなかった僕も相当抜けてると思つが。

「2泊3日よ」

普通だ……。

僕は顔を洗いに洗面所へ行く。

きゅっきゅっ。じゃー。さぼっ。びしゃびしゃびしゃ。すぱすぱ。すぱすぱ。きゅっきゅっ。「じゅじゅ」
と、

コンコン

どうやら食事が来たようだ。

対応早っ！

扉を開けて暦が対応する。

「食事をお持ちしました」

ちらつと入口を確認する。

中井さんだ！

どっちかはわからないけど。

「わかりました。では、中へ運んでください」

「かしこまりました」

僕の横を中井さん（どっちかはわからない）が通る。

この匂いは……。

「理佳さん、おはようございます」

「おはようございます、久寿米木さん」

にっっ

かわええなあ！

理佳さんが作業をしながら聞いてくる。

「それにしても、よく分かりましたね。両親もたまに間違えるとい
うのに」

「分かりますよ。人を　しかもこんなにもかわいらしい人を間違
えて呼んでしまうのは失礼ですからね」

本当は匂いでだけど。

「あ、ありがとうございます・・・」

照れてる理佳さんかわいいーなー、もう！

「あ、そういえば・・・」

と、理佳さん。

「どうかしましたか？」

「いえ、その・・・」

僕と話をしながらも手を休めることなく働く。
ちゃんとした人だなー。
僕と同じ大学生なのに。

「失礼を承知でお聞きしますが、昨日お会いした時も眼帯を付けていらつしゃいましたよね？ですから、その」

ああ、なるほど。

昨日も眼帯を付けていて今日も眼帯を付けている。

と言うことは、目の病気が何かなのかと言うことが聞きたいということか。

まあ、眼帯付けて旅行している人なんてそうそういないよね。

「いえいえ、別に病気とかじゃないので大丈夫ですよ。ただのアイマスクの代わりみたいなものですので」

そういうと、理佳さんは安心したように、

「あ、そうなんですか？よかったー！昨日玲ちゃ・・・姉が久寿米木さんの眼帯を妙に気にしていたので私も気になってしまって・・・」

玲さんが僕の事を気にしていた？

良い事を聞いた。

朝から良い気分だ！

「まあ、そうですね。旅行する人で眼帯を付けている人なんてそうそういませんよね」

そんなこんなで食事が運び終わり・・・。

「では、失礼します」

理佳さんは行ってしまった。

「久寿米木くん」

おっと、すっかり存在感を失っていたがもう一人いたんだよね、この部屋。

振り返ると奴がいた。

目の前に。

「さーて食事も来たし、食べよ」

「久寿米木くん」

「……はい」

昨日もこんな展開あったような気がするのは気のせいではない気がしないでもない。

「随分とこの旅館の仲居さんと仲が良くなったのね。全然気が付かなかったわ」

「……立ち話もなんですからとりあえず座りませんか？」

「そうね。私もじっくりと聞きたいものね」

ぬかった！

墓穴を掘ったか！

というわけで、とりあえず席に着く。

構図は僕の正面に曆がいる。

「……」

「・・・・・・・・」

あー沈黙と視線が痛い。

よっぽど自分の存在がないものとして扱われたのが腹立たしいようだ。

「さて、仕切り直しましょうか久寿米木くん。随分とこの旅館の仲居さんと仲が良くなったのね。知らなかったわ」

「いや、そんなことは別にないと思うけれどね。昨日の夜、僕が飲み物を買に行った時に少し話をしたただだよ」

「その話のお陰で私に飲み物を献上するまで時間がかかったのかしら」

「まあ、そうだね」

献上で。

「なるほどね。昨日 今日の説教は私がずっと喋りっぱなしだったからそのあたりの理由を聞きそびれてしまったわね」

「・・・・・・・・」

「少し話が逸れたわね。それで、久寿米木くん。どんなお話をしたのかしら」

「いや、特には。普段何しているのかとかどんな性格なのかとか。それくらいだよ」

「それだけ？」

「まあ・・・だいたいは」

「そう。・・・じゃあいいわ」

「え、いいの？」

「ええ。これからは私の事も頭の片隅程度には置いておいてもらえ
るとうれしいわね」

「・・・まあ、じゃあ一応はじめとして謝っておくよ。存在をない
ものとして扱ってしまい申し訳ありませんでした」

「すこしカチンとくる言い方だけれどもまあいいわ。ご飯が冷めてし
まうわ。頂きましょう」

「そうだね」

そして食事はつつがなく終了。

食べ終わった食器類を廊下に出して、外出の準備を始める。

暦の立てた計画だと、30分ほどしたらもう外にでなければなら
ないらしい。

と、その前に。

いつまでも眼帯をしている訳にはいかない。

コンタクトを付けなければ。

僕はテーブルの上にコンタクトのケースを出して、眼帯を外す。

「ぶっ」

1日の中で最も嫌な時間がやってくる。

コンタクトを付ける際、必ずどうしても裸眼の状態で見開けなければならぬ。

僕の右眼の未来を見る能力は、自分の意志ではどうにもならず、右眼を開けると無条件で発動してしまう。

そして、未来を見るという情報量の多さから脳に負担がかかり激しい頭痛に襲われる。

ふと、周りが静かになったと思いい視線を上げる。

外出の準備をしていたはずの暦がテーブルの向かいに座ってお茶を飲みながらこつちを見ていた。

どうやら準備は済んだらしい。

当然か。

いつから起きていたかは分からないけれど、僕より早く起きて、着がえとか大体終わっていたしね。

「どうぞ、続けて」

両手の平を上に向けてどうぞのポーズをする暦。

なんかやり難いな・・・。

まあ、仕方がない。

僕は右眼を開ける。

「つつ　　！！」

その瞬間、これからこの部屋で起こる未来の映像が脳へ流れ込む。そして激しい頭痛が襲う。

それに耐えながら、コンタクトレンズを入れる。

眼を開いてから入れるまで、その間約5秒。
と、

！！

「どうかしたのかしら、久寿米木くん」

僕はある未来を見た。

それは

「・・・っつー痛いね・・・やっぱり。毎日の事で5秒程度なら
気絶しない程度には慣れなければね」

10秒を超えるとその頭痛がひどくなって、さらには倦怠感も出
てくるけれど、5秒とか数秒なら激しい頭痛だけで済む。

「そんなことより、なにか見えたのかしら、久寿米木くん」

そんなことって・・・。

酷いな。

もう少し心配してくれてもいいのに・・・。

まあ、いいや。

今はそれよりも

「40分後に、タイガーマスクがこの部屋にやってくる」

「は？」

暦も驚くんだ・・・。

僕はその事実には驚いた。

「ちょっと言い方が悪かったかもしれないね。正確にはタイガーマ
スクのマスクをかぶった奴がこの部屋に侵入して、いろいろと漁る

んだよ」

僕は出来るだけ正確にこれから40分後に起こる出来事を伝えた。

「タイガーマスクって、作品中の孤児院「ちびっこハウス」の主人公伊達直人が動物園の虎の檻の前でケンカをしたのをきっかけに、悪役レスラー養成機関である「虎の穴」にスカウトされ、その養成機関「虎の穴」での殺人トレーニングをこなす日々の中で、伊達直人は「自分と似た生い立ちを持つ孤児達に、同じような苦しみを味わわせたくない」という想いを次第に抱くようになり、虎の穴を卒業後、「タイガーマスク」としてプロレスデビューをして、収入の一部を孤児院へ寄付するようになり、最初の内は「虎の穴」へフアイトマネーを支払った、自分の手取りの範囲内での援助を考えていたが、自分の出身施設である孤児院「ちびっこハウス」の金銭的現状を知り、虎の穴へ支払っていたフアイトマネーの半額分まで寄せざるを得なくなり、そのことに腹を立てた「虎の穴」が育て上げたにも拘らずフアイトマネーを支払わないタイガーを裏切り者とみなし、タイガーを倒すための刺客を次々と送り、伊達直人はタイガーマスクとして、孤児院の為に戦うという漫画作品の主人公で、現実世界では、アニメ作品「タイガーマスク2世」のタイアップとして誕生したプロレスラーの、あのタイガーマスクの事であっているのかしら?」

「僕は、「どうしてタイガーマスクについてそんなに知っているのかしら?」と聞きたい気分だけれど、まあ、そのタイガーマスクであっていると思うよ」

長っ!

本当になんでタイガーマスクについてそんなに詳しいんだよ。

「知りたい？仕方がないわね。教えてあげる。私には実は兄がいてね。その兄が漫画やアニメに詳しいのよ。あまりおおっぴらには言いたくないのだけれど」

あーなるなる。

とうか兄妹いたんだね。

初めて知ったよ。

小学校時代も知らなかった。

地獄絵図的な旅行になるかと思っていたけれど、意外と良い旅行になるかもしれない。

なんとなく、そう思う。

「それにしても」

暦が言う。

「どういうことなのかしらね。私達の部屋にタイガーマスク（仮）がコソ泥の真似ごとをしに来るなんて」

確かにそうだ。

暦はともかく、僕は礼儀正しく毎日を生活していて誰かに恨みを買われる覚えもない。

そもそも、京都に今まで来たことだってない。

暦はあるらしいけれど。

「暦、何かした？誰かに恨みを買うようなこと」

僕にはそれしか考えられないね。

「まさか。私を誰だと思っているのよ」

月村曆だよ。

口が無駄に頭がよくて物知りで、その知識で人をねじ伏せることに長けた口の悪い奴だよ。

でも、「私を誰だと思っっているのよ」と言われれば、まあそうだよな。

口が悪くて悪態をつくのは親しい人にだけだよな。

この旅館でも女将さんのあの老婆にも敬語を使っていたし。

そう考えると、見知らぬ人から恨みを買っようなことはないか。

じゃあ一体。

「久寿米木くん」

「なにかな」

「ひょっとしてという、可能性の問題なのだけれど」

前置きをして曆は言う。

「久寿米木くんの能力がらみ、と言うことは考えられないのかしら」

「・・・」

なるほど。

考えられない事でもないか。

確かに、僕の能力はどんなことにも利用しようと思えば利用できる。

それが例え、人助けだろうと金儲けだろうと犯罪だろうと。

「つまり曆は、どこかの誰かが僕の能力の事を知り、利用しよう」と

考えている、と?」

「簡単に言つとそうね」

「うーん・・・」

僕的能力が覚醒してから今までこういった事はなかった。

だから今回、これから起きる事がどういいう意図を持ったものなのか判断できないな。

ただの旅行者を狙つたコソ泥なのか。

それとも、暦の言う通り僕的能力を狙っているのか。

あるいは、それ以外の目的があるのか。

「久寿米木くん。本来ならば私達はこれから起きる事を知らないのだけれど、あなたの能力で知ってしまったわけね。と、ここで2つの選択肢が出来るわ。?このまま外出して観光、そして帰って来てから警察に通報して普通の被害者として被害届を出す。?出かけたと見せかけて、タイガーマスク(仮)を待ち伏せし、私達で犯人の目的を暴くなり捕まえるなりする。さて、どうしたらいいのかしらね」

警察に任せるとすると、もしタイガーマスク(仮)が暦の読み通り僕を狙ってきたとすると色々と厄介だ。

しかし、普通のコソ泥という可能性も捨てきれない。

どうする。

「とりあえず・・・念には念をと言つ事で、ね。それでどうか?」

「分かつたわ」

そういう訳で、僕はタイガードマスク（仮）を待ち伏せることにした。

話し合いから35分後。

僕は1回旅館をでて観光に出かけた風に装って、非常口を使って部屋に戻り、奥の8畳間の押し入れの中に2人で隠れている。そして、襖に小さな穴を開けて、そこから部屋の様子を見ていた。

「そろそろね」

「ん・・・」

ザリッ

と、ドアに鍵が差しこまれる音がした。

「来たわね。信じていなかった訳ではないのだけれど、久寿米木くん、本当に未来が見られるのね」

「めっちゃくちゃ頭が痛くなるけどね」

「こんなときでも曆は余裕があるな。呆れつつ僕は感心した。」

ガチャ

とうとう、中に入って来たようだ。

この旅館では、外出している間に部屋の整理をしてくれたり、というわけではない。

そして、厩も隣にいる。

不法侵入者であることに間違いはない。

「久寿米木くん。随分おもしろい状況になっているわね」

「否定はしないよ」

タイガーマスク（仮）が部屋の中に入って来た。

想像していたよりも恐怖心はない。

なぜなら

「和室にタイガーマスクのマスクを被った人がいるというのは滑稽ね」

と、言うことだ。

違和感ありまくりだ。

ちなみに、タイガーマスク（仮）とか言っているが、服装は普通の男物の服で、ジーパンに長袖Tシャツだ。

そんなことを小声で話していると、タイガーマスク（仮）に動きがあった。

・・・（仮）面倒臭いね・・・。

「久寿米木くんの荷物を漁っているわね。・・・いえ、漁っているのではない様ね。なにか・・・付けているわね」

タイガーマスク（仮）が手に持っているのは何だろうか・・・。
よくわからないけど、とにかく手に収まるサイズのものだ。

それを僕のバックに取り付けている。

「そろそろ行きましようか。私が注意を逸らしておくからその間にあなたが入口の方へ行つて鍵をかけてきて。もし逃げられることになつても多少の時間稼ぎにはなるはずよ」

「わかつたよ。気を付けてね、相手が何者か分からないから」

「それはお互いさまよ。あなたも気を付けて。相手はなんと言つても・・・タイガーマスクなのだから」

そういつて暦は笑つた。

こついう、かわいい笑い方も出来るのか。

また一つ、暦を知つた僕だつた。

「では、1、2、3で私が襖を開けるから、久寿米木くんは一気に行って。すぐ後に私も出て、なんとかするから」

「策はあるの？」

「ええ、もちろん。じゃあ、いくわよ。・・・1・・・2・・・3」

ガラツという音と共に僕は一気に駆け出す。

タイガーマスク（仮）は一瞬でこちらに視線を向けて来る。

しかし突然の事に反応は出来ていない。

そのすきに、僕はタイガーマスク（仮）の横を通り出入口へ。数秒で辿りつき、すぐに鍵をかけた。

暦は？

僕はすぐに振り向いて状況を確認する。

曆は。

「エルボーバット！（曆）」

肘を曲げて、前へ高速で付きだす。

タイガーマスク（仮）は一瞬でギリギリ躲せる位置まで後ろへ下がって躲す。

そして、今度はタイガーマスクが

「ローリングソバット！（タイガーマスク）」

横回転しながらジャンプし、高く上がった右足の裏で、顔を蹴りつけようとする。

曆はそれを上体を逸らすことで避ける。

「なっ どうなってるの、これ・・・」

曆はタイガーマスク（仮）と闘っていた。

ここは後楽園ホールか！

**第3話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ
ども、よねたにです。**

第3話です。

結構無茶な展開かな？と自分でも思いますが、読んでくれたら幸いです。

次回は少し先になります、と先に言っておきます。

それでも1週間のうちに書けたらなとは思っていますが。

では、また。

第4話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

場所は旅館の部屋。

時刻は朝9:30。

そして、この部屋にいる人物。

僕（久寿米木春希）、暦（月村暦）、タイガーマスク（仮）。
状況。

暦VSタイガーマスク（仮）

僕、静観。

ちなみにタイガーマスク（仮）は普通の男物の服を着ている。
ジーンズに長袖のTシャツだ。

・・・どんな状況だよ。

っていうか！

「なに、暦。その戦闘能力。どこで手に入れたのさ」

今はならみ合っているだけだが、いつまた戦闘になるか分からないので、巻き込まれないように離れた出入り口付近から聞く。

「何年か前にかじっただけよ。気にすることないわ」

「かじったレベルじゃないよ、明らかに」

本物の格闘家の戦闘だった。

奥義とか継承して、師匠を乗り越えたりしてきたんじゃないか？

暦の戦闘能力について話していると、

「なるほど。まんまと罠にはまった訳か。未来を見る能力でも使ったのか？久寿米木」

ボイスチェンジャーによって変えられた声で、タイガーマスクが言った。

「ええ。まあ、未来を見たのは偶然だったのだけれどね」

「なるほど。やはり事実だったか。情報としてしかしらなかったが・
・本当だったか」

「情報？それは何処からの情報なのかしら。あなた自身？それとも他にも仲間がいるのかしら」

「言う訳ないだろうが、と言っておいた方が敵らしくていいかな？」

「敵らしいかどうかはともかくとしても・・それはそうね。愚問だったわ」

あれ、なんか僕の話なのに僕、蚊帳の外じゃないか？
だからと言って話しに割って入る気にもならないけれど。
別にビビってるという訳じゃないんだよ？
だって、この2人めっちゅ強いんだもの。
と、ここに来てすこし空気が変わる。

「さて、本来ならば、このまま帰るつもりだったのだが・・・。とんだ邪魔が入った。しかもかなり出来る奴だ」

「タイガーマスク（仮）に褒めてもらえるなんて、光栄だわ」

偽物だけどね。

「どつやら口も立つらしい。・・・仕方がない。本気を出させてもらおう」

あれで本気じゃなかったのか!?

このあと2回変身を残しているとか言わないよね?

「あら、じゃあ私も少し本気を出そうかしら　っ!」

曆は不意に目にもとまらぬ速さでタイガーマスク(仮)の顔面に蹴りを入れる。

「っ!」

不意の事に反応が遅れたタイガーマスクではあつたがかるうじて直撃は避ける。

が・・・。

「こんなことが現実に・・・?」

と、僕が言ってしまうような事が起きた。

なんと蹴りを入れた際の風圧でマスクが破れたのだ。

バトル漫画かよ・・・。

しかしこれでタイガーマスク(仮)の正体が分かる訳だ。

一体誰なんだ?

「まさかここまでやるなんて・・・驚きだわ」

ボイスチェンジャーが壊れたのか、顔を隠すために下を向いているタイガーマスク(仮)から地の声が聞こえる。

口調も変わっていた。

そしてその声が　。

「あら、あなた女性だったの。気付かなかったわ。では、服の下には詰め物でもしているのね。よくそれで動けたものね」

至って冷静な曆。

対照的に僕は、

「え、女？ウソでしょ!？」

取り乱していた。

しかし、徐々に冷静になっていくにつれて少し違和感を覚えた。

「ん？」

「どうしたの、久寿米木くん」

「いや、さっきの声、どこかで聞いたような・・・」

「あら、知り合い？」

「いや、分からないけど・・・」

でも、最近どこかでこの声を聞いた気がする。
本当に最近なんだよ。

どこだったかなー。

「思い出せないの？昨日話したばかりなのにね、久寿米木さん」

「え？・・・昨日？・・・あ、え、まさか!」

僕にヒントを出したタイガーマスク（仮）がマスクを外して、ゆつくりと顔を上げる。
その顔は

「中井さん！」

中井さんだった。

まだ、どっちはわからないけれど。

「あら、仲居の中井さんだったの。全く気が付かなかったわ。何回か会っていたのにね」

暦がそういうと、仲居さんは一瞬訳がわからなさそうな顔をするが、すぐに理解したらしく表情を戻す。

「ああ、そういうことね。あなたとははじめましてよ、月村暦さん。私は中村玲。中村理佳の姉よ」

なるほど。

玲さんだったのか。

確か昨日空手や柔道をやっていたとか言っていたし。道理で強いわけだよ。

僕はちらつと暦を見る。

多分理解できてないんだろうな。

「久寿米木くん、このよく分からない状況を説明してくれないかしら」

案の定理解できていなかった。

暦は仲居さんが2人いるってことしか知らないようだし、仕方がないか。

僕は、暦にこの旅館の2人の仲居さんは顔がよく似た姉妹で、姉がこの玲さん、妹が食事を運んでくれてくれた理佳さんであることを説明した。

「この旅館はそんなややこしいことになっていたのね。気が付かなかったわ」

暦はすぐに状況を理解したようだ。

そして、臨戦態勢のまま僕のいる出入り口の方へ来る。

くるなよ。

あぶないじゃないか。

言わないけど。

「では玲さん。ここは刑事ドラマのようにいろいろと語ってくれないかしら。ほら、動機とかここまでの経緯とか、ね」

状況を全て理解した暦は大分余裕が出て来たようで、玲さんを軽く挑発するように言った。

それに対して玲さんは、追いつめられたこの状況でも余裕を見せていた。

「いいわね。じゃあ、教えてあげる」

そう言って笑う玲さん。

その笑みは昨日、理佳さんと仲よさそうに話していた時の笑みとは程遠いものだった。

そして玲さんは語り出した。

刑事ドラマの犯人のように……。

「私が久寿米木さんの能力について知ったのは、私が普段勤めていた研究所でね。そこで、誰が、と言うことまでは特定できていなかったけど、そういう能力を持った人が日本にいる、って言うのを耳にしたのが最初ね。それが先月の話。もちろんそんな話、私は信じていなかったけれど。でも昨日の夜、私がこの部屋の前を通った時、あなた達の話声が聞こえてきてね。そこで聞いてしまったのよ。あなたに未来を見る能力があるって話を。私は研究所での話を思い出したわ。それでひよっとしたら、本当なのかもしれないって思ったわ。これが、あなた　久寿米木さんの能力を知っていた理由ね。次は動機ね。どうしてこんなことをしたのか。その理由。実は私

いえ、私達姉妹は、孤児院の出身なのよね。今まで育ててもらった両親は里親ってわけ。だからと言って、嫌いじゃないわよ。むしろ感謝しているし、大好きよ。で、その出身の孤児院が最近の不景気で経営出来なくなってきたのよ。私は、お世話になった孤児院がなくなるというのは耐えられなかった。それに、孤児院の子供達の事もあったしね。だから、少しでもと、研究所で働いて得たお金の一部を寄付していたの。でも、最近はそれでも足りなくなってきたしまったの。そんなときにあなたの能力を知った。あなたの能力があれば、お金を幾らでも手に入れることが出来る。そして、未来を見る能力を持った人が、今すぐ近くにいる。こんなチャンスはこれから二度とないかもしれない。だから私は、あなたの荷物に発信器と盗聴器を付けて家を探そうと、こういうことをしたの。ちなみに、家を知った後は無理やりにも入って、あなたに能力を使ってもらうつもりだったんだけどね。嫌だと言ったら刃物でもちらつかせてね」

タイガーマスクのマスクを被っていたのには、そんな理由があったのか。
っていうか、タイガーマスクそのままみたいな理由だ。

なるほどね。

孤児院とその子供達を救うため、か。

悪いことに利用するとかではない分、まだ良かったかな。

でも、この能力は使うことが出来ない。

僕の為、と言つのもあるけれど、この能力にはまだ誰にも言っていない代償があるから。

「これで全てよ。だから久寿米木さん、私と孤児院とそこにいる子供たちの為に、その能力を使ってくれないかしら。ただ、お金を手に入れさえすればいいから、ね？」

動機やらなにやらを目一杯喋りつくした玲さんは、僕にプレッシャーを与えながらお願いしてきた。

できれば、代償について言及せずに、引き下がってもらいたいのだが、なかなか引き下がりそうにないな。

代償。

僕に頭痛や倦怠感が出るだけでなく、能力を使うと、僕の寿命を縮めること。

そして。

人の為にこの能力を使うと、僕の寿命だけでなく、未来を見ること。よって利益を得る人感じる人の寿命も同時に縮めてしまうこと。能力によって周りに及ぶ変化の規模が大きければ大きい程、縮める寿命も大きくなる。

今回の場合だと、僕と玲さん、そして孤児院の子供達の寿命を縮めてしまう。

恐らく、数年から十数年。

僕は出来れば、命を盾にしたくはない。

さて、このことに触れずに引き下がってもらえるだろうか。

「久寿米木くん、どうするの？あなたの能力なのだから、あなたが判断して。私はそれに付いて行くわ」

・・・とりあえず、僕の意志を伝えるか。

「玲さん、僕は・・・使いたくはない」

「どうして？何か理由があるの？」

鋭い！

理由があるけど、まだ言いたくありません！
んーどう切り返すか・・・。

「本来ならば、こんな能力この世にないはずだろ？だから」

「でも、あるじゃない。せつかくあるんだから有効的に使ったらどうっ？」

正論だ。

ある物を使う。

当たり前的事だ。

と、ここで暦が助けに入る。

「まず、私は久寿米木くんの味方よ。久寿米木くんが使いたいというならばそれに賛成するし、使いたくないというのならばそれに私は賛成するわ。それで、中井玲さん。あなたは知らないだろうけれど、この能力を使うと、久寿米木くんにも負担があるの。久寿米木くんがとても苦しいことになるの。それでも、久寿米木くんに能力を使えと言っのかしら」

「でも死ぬわけではないんでしょう？ だったら使って欲しいわね。こっちは子供達の生活が掛っているのよ！」

これでも引かないか。

仕方がない。

正直に話すか。

「玲さん。僕が能力を使うと情報量の多さから脳に負担が掛って、激しい頭痛になるのは、暦の言うとおりです。でも、実はそれだけじゃないんです。未来を見る代償は。まず、僕の 寿命が縮まります」

「久寿米木くん、私はそれ、初耳なのだけれど」

「まあ、誰にも言っただけだからね。そして、それだけではないんです。特定条件 人の為、という条件が付加されると、未来を見ることで利益を得る人感じる人にも、僕と同じ代償があります。つまり、今回の場合で考えると、僕と玲さんと子供達の寿命が縮まります」

「な
」

さすがの玲さんも困惑していた。

そして暦は玲さんと同じく困惑しながらも、怒っているような、悲しいような、どちらともとれない表情をしていた。

「では、久寿米木くん。あなたがコンタクトレンズをするときも、寿命を縮めていたのかしら。それも毎日」

「一応そういうことになるけど、秒数としては数秒だから寿命で言

うと数分単位だから大したことはないよ。感覚で解るんだ。命が減っていく感覚があるからね。でも、連続して何十秒とかあるいは、未来を見てから都合よく環境を大きく変化させたりすると、数年から十数年、寿命が縮む。今回はこれにあたるね。」

「それでも、死ぬわけじゃないのよね？死にはしないのよね？」

最悪の事態になるのかどうか。

玲さんは聞いて来た。

「恐らくは、としか言えません。正確にどれくらいの寿命が減るといえるのは分からないので」

「死ぬ危険がないのなら、能力を使って」

「使えません。言いましたよね？あなたの命も、子供達の命も減ってしまうんですよ？」

「そんなこと分かっているわよ！どうして！？どうして使わないの！？その能力を使ってくれれば多くの子供たちが助かるのよ！？」

「それでも、です」

「たった数年・・・多くてもたったの十数年なんですよ！？今すぐは死なないんですよ！？だったら使ってよ！その能力で子供達を助け　っ！」

パン！

暦が、玲の言葉を遮るように頬を打つ。

「やかましいわね。それはあなたが決めて良いことではないはずよ、中井玲さん。あなたに子供達の人生を勝手に弄る権利はないわ」

「で、でも！」

「黙りなさい。たった数年？ たったの十数年？ ふざけているのかしら。私はまだ10代だからわからないけれど、人生後半の十数年はとても大事なはずよ。会社員なら、会社を退職して 働き終えて、これからの人生、自由に生活していこうという時期よね。もし結婚していれば、夫婦水入らずで自由に楽しく生活していこうという時期よね。十数年あれば、やりたいことをいくつも出来るわよ。そんな大切な時期の十数年を「たった」なんていう権利があなたにあるのかしら。甚だ疑問ね」

「でもお金は」

「そうね、お金は必要かもしれないけれど、子供達の命を使ってまで得るお金は必要ないのではないかしら」

「・・・」

暦は僕の言いたい事を全て言っけていくれた。

僕が能力を使うか使わないかの話なのに、暦が話の中心になっている・・・いつのまにか。

なんとなく、一抹の寂しさがあるな・・・。

僕が目当てで玲さんはこんなことをしたのに・・・。

「子供である今の時期は、人生の中でも大切よ。でも、貧しくてもみんなで いえ、家族と一緒に楽しく生活できれば、それはそれ

で良いのではないかしら。それとも、あなたの守ろうとしている子供達は裕福でお金が有った環境でないと楽しく生きていけない様な、イヤで軟な子供なのかしら」

暦のこの言葉が、事件になりそこなった事件の幕を閉じたといっても過言ではないだろう。

その後、僕達は予定通りに京都を観光した。

玲さんについては妹の理佳さんには言わないでおいた。

玲さんも前と変わらずに接して、平和にこの京都旅行を終えることが出来た。

そして、今。

僕は帰りの新幹線の中にいる。

暦が気を使ってくれたのかどうかは分からないが、暦は僕の左隣に座っている。

普段いろいろ言っているけど、こういう所はかわいらしいよね。それにしても、と思う。

はたして、僕の能力を使わないという選択は正解だったのだろうか。玲さんも言っていたけれど、死ぬわけではないし、何十年も生きる事が出来る。

ただ少し、短命になるということだけだ。

それで、今の居場所で楽しく暮らす事が出来る。

孤児院という場所柄、楽しさは重要なポイントだろう。

今後、こういった能力を使うべきか使わざるべきか迷うときがあるかもしれない。

僕は間違った道を進まずに済むだろうか。

ただ、それでも僕は命が大事だと思う。

それがたった数年であろうと。

「暦はどう思う？どちらが正解なのかな。その人が思う大切なものと命って」

僕は隣で眠そうにあくびをしていた暦に聞いた。

「そんなもの、私に聞かれても困るわね。でも、そうね。その人の大切なものと命を天秤にかけたとき、どちらに傾くかなって、その人次第よね。でも、久寿米木くんはそれでも命の方が大切だと思うのでしょうか。私もそう思うわ。だって 大切なものが大切な訳ではないのよ。大切なものを大切に思う気持ち、心が大切なのだと私は思うから」

「うーん・・・分かるような分からないような・・・」

「そうね、少し抽象的だったかしらね。要するに「命」あつてのの「心」、「心」があつての「大切なもの」。心がないと、大切なものを大切に思えないでしょうか？」

「大切なもの<心<命ってこと？」

「身も蓋もない言い方をするとそういうことね。だから、久寿米木くんが命の方が大事だと思うなら、それに反抗する人がいたら説得すればいいのよ。能力を使うのは久寿米木くんなのだから」

そういつて、暦は目を閉じた。

本格的に寝に入ったようだ。

そうだなー。

まあ、そういう状況になってみないと分からないしね。

よし、考えるのはよそう。

もう疲れた！

そして、僕も寝た。

こうして、暦との京都旅行は幕を閉じた。

**第4話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ
ども、よねたにです。**

ごたごたした状況で書いていたので、内容がぐだぐだしているかも
しれません。

とりあえず、これで京都旅行編は終了です。

次回からはまた別の話になります。

では、また。

第5話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)

夏休みもまだ前半の今日は8月12日。

時間は11:30。

タイガーマスクと遭遇したりした怒涛の京都旅行から数日がたった。僕はなにもすることがないので、とりあえず大学の部室に来ていた。

この部室はかなり快適だ。

広さは15畳程あり、エアコン完備でテレビ、パソコン、ソファ、冷蔵庫などくつろぐには申し分のない空間だ。

そんな部室には僕以外にももう1人いる。

月村暦 ではない。

今、暦は沖縄にいる。

なんでも、昔に沖縄に移住した親戚の人が亡くなったそうで、その葬式に出なければならぬそうさ。

しかも、親戚と言っても近い親戚ではなく、今まで会った事もないような遠い親戚だそうさ。

母方のおばあちゃんが親しかったらしいが、そのおばあちゃんが病気で入院してしまっていて、代わりに暦の母親が行くことになったが、どうせなら家族で行こうということになったらしい。

沖縄へ行く直前まで部室に顔を出していた暦は、

「なんで夏休みという最も暑い時期に沖縄に行かなければならないのかしら。一体前世が何をしたというのかしらね」

と、自分の普段の行いを棚に上げて、前世のせいにしていた。

そして明日東京に戻ってくる。

と言う訳で暦ではない。

では一体誰かと言うと 雨倉しずかだ。

だれやねん。

では説明。

雨倉しずかは僕達 僕と暦の小学校時代の友達で、暦と同じくこの大学で再会した。

実は回想などでも名前がちよくちよく出ていたりする。

最近まで忘れていたけど、しずかも暦と同じで僕の未来を見る能力について知っている。

そして、このサークル、趣味研究会の幽霊部員。

幽霊部員なのになんでいるんだろう、と思うがそれにはちゃんと理由がある。

それは

「それにしてもさ、暦のいない部室は快適ねー！」

と、言う理由だ。

暦はしずかを嫌悪していて、しずかも暦を生理的に受け付けていない。

僕は2人に対して普通だけれど。

そついう間柄だ。

「暦がいないから来たの？」

僕が聞く。

ちなみに今の構図は部室中央にどんと置かれているテーブルに向かい合って座っている。

僕はいつもの指定席。

しずかはいつも暦が座っている席。

「まあね。一緒に居ると多分武力闘争とかになるかもだから」

そつういえば、しずかはガスガン収集とサバイバルゲームが趣味だ

ったな・・・。

しかもガスガン改造してるし。

いつだったか自慢げに、

「このガスガン、弾の速さが秒速100mなんだよ！？すごくない！？」

つてうつとうしかつたのを覚えている。

あ、別に僕は嫌っている訳ではないんだよ？

そんなしずかと、京都旅行の際、恐ろしい近接戦闘力を見せた暦が闘う？

部室が崩壊するよ・・・。

壁に弾痕が残ったり、備品が破壊されたり・・・。

僕が脳内戦闘シミュレーションをしていると、

「あー退屈。部室に来れば何かあると思ったんだけどなー・・・
ねえ、テレビ付けて良い？」

と、しずかが言った。

確かに暇だ。

やることが無さ過ぎる。

「うーよ」

「んじや・・・」

テレビの電源が付く。

すると、暦がよく見ている昼の情報番組が流れていた。
時間を見る。

12:00。

丁度始まったらしい。

ミシマ（以下ミ）『みなさんこんにちは。司会のミシマです。そして』

オオクラ（以下オ）『どうも、今日からコメンテーターをやらせていただきます、オオクラです』

ミ『という2人でお送りいたします。さて、早速なんですが』

オ『どうしましたか、ミシマさん』

ミ『実はですね、家が燃えちゃったんですよ』

オ『誰の家ですか？』

ミ『私の家に決まっているじゃないですか。なんでテレビの全国放送一発目の話で他人の家の火事について話すんですか。意味分らないですよ』

オ『あはははは！それもそうですね！』

ミ『火事にあつたという不幸な話をしようとしているので高笑いしないでくださいね。いらつときますよー』

オ『あ、すみません。ちょっと昔、火遊びを嗜んでいたもので。フラッシュバックが』

ミ『オオクラさんのやっていた火遊びの内容についてはあとで話しましょう。念のため、警察にも連絡を。で、話を続けてもいいですか？』

オ『どうぞ』

ミ『ありがとうございます。それで私の家が火事になってしまったんですよ』

オ『全焼ですか?』

ミ『いえ、私が普段使っている部屋の書斎だけです。マンション住まいなので、大変でしたよ』

オ『原因は?』

ミ『タバコですね』

オ『あーもう王道、英語で言うとキングストリートですね』

ミ『英語になってませんよ。直訳しすぎです。流れるにはこうですね。その日、家に帰って真っ先に書斎に行ってタバコを吸っていたんですよ。それで、しばらくして時計を見たらもう11:00だったんですね。で、その時間から見たいテレビ番組があったので、テレビのあるリビングに、タバコを灰皿に入れて向かったんですよ。それでテレビを見始めて、そうですね・・・だいたい15分くらいたったときでしょうか。いきなり「ツパーン!!」って音が聞こえたんですよ』

オ『・・・スパンキングですか?ミシマさんの部屋が火事になっているとき、隣の部屋では夫婦が夜の営みを・・・』

ミ『スプレー缶です。スプレー缶が熱で破裂したんです。火事の話をしているんですから流れで察してください。あとお昼の番組なの

で自重してください』

オ『あ、すみません。昔、夜遊びを嗜んでいたもので。フラッシュバックが』

ミ『どんな夜遊びかは聞きませんよ。話、続けます。それで音が聞こえて私は「銃声？」って思ったんですよ。でも、そんな音が聞こえるはずがないし……。そう思っていると、こんどはビニールやプラスチックが燃えたときの匂いが鼻をついたんですよ。それがかなり強烈なおいでして。さすがに自分の家の異変に気がつきまして。書斎に行つて、ドアを開けたら目の前には火柱が立っていたんですよ』

オ『ここは焼却処理場か！』

ミ『そんな風に突っ込む余裕なんてありませんでしたよ。もし、その現状でそんな風に突っ込める人がいたら、どれだけ心臓に毛が生えた人なんでしょうね』

オ『ミシマさん、突っ込まなかつたんですか？』

ミ『私の本業は司会なので。こんな風に毎回突っ込んでいる訳ではないんですよ、オオクラさん？』

オ『それで？どうなつたんですか？』

ミ『……。それで、ドアを閉めて消防に連絡したんですよ。「火事なので急いで来て下さい！」って。そしてら5分もしないうちに消防車が到着したんですよ。「え、こんなに早いのか？」って思っ
ちやうくらい早かつたですね』

オ『じゃあ、これからはタクシー呼ばずに消防を呼ぼうと?』

ミ『そんな迷惑な国民になるつもりはありませんよ。それで、消防の方が、ホース持って私の部屋に入って、バーっとなっという間に鎮火したんですよ。本当に速かったですね』

オ『そうですね、日本の消防などの救急対策は世界に誇れるものがありますからね。世界トップクラスと言ってもいいでしょう。この辺りはかなり整備されていますからね』

ミ『急にコメンテーターらしくなりましたね。いいんですけど。いいんですけど、なんか違う!』

オ『ミシマさん、もうオープニングだけで15分使っていますよ。真面目に司会進行していただかないと』

ミ『こい・・・つつ!・・・あ、失礼。では次のコーナー』

オオクラさん、コメンテーターに昇格したんだ。

つていうかこの番組、前見たときより酷いな。
でも暦はこの番組割と見てるよな!。

「ねえねえ春希、この番組、割と面白いね」

忘れられているかもしれないけれど、春希と言うのは久寿米木春希こと僕の名前だ。

みんな久寿米木という名字で呼ぶからね。

名前で呼ぶのはしずかくらいしかいない。

それから、なんだって？

この番組が面白い？

おかしただけじゃないのか？

「この番組は暦も好きっぽいんだよね。なんだかんだ言っ
て2人つてどこか似ている」

あ、しまった。

地雷踏んだかもしれない。

ズダン

僕の後ろの壁に突然溝が出来た。

「なにか言った？」

しずかはガスガンをガンベルトから抜き、僕に向かって発砲した。今日しずかに会うまで、間が3ヶ月以上開いていたから忘れていたけど、しずかは暦と同じにされると、物凄く怒るんだった。

まあこれは暦においても同じだけれど。

暦としずかは2人一緒に扱われたりすると、容赦なく怒る 常

人レベルではない怒り方で。

しずかに至っては発砲する。

忘れないようにしなければ。

命が危険だ。

っていうか、なんだよこのサークルの特殊な人率！

武闘系のサークルに変えたって通用する人材だよ！

近接戦闘のプロに射撃戦闘のプロ、それで未来が見える僕が監督か？

とりあえず今は

「う、ごめん」

謝った。

「いいよ」

許された。

しずかの性格はかなりさっぱりしている。

感情の起伏が激しいが、すぐに元に戻る。

熱しやすく冷めやすい。

これほどこの言葉が当てはまる奴はそうそういないだろう。

暦は真逆と言っても過言ではないかもしれない。

感情の起伏に乏しく、一度感情に変化があるとなかなか戻らない。

熱しにくい冷めにくい。

趣味は似ているんだけどね……。

「そつえばさ、京都に旅行行ったんでしょ？暦と2人で」

しずかが先日の旅行について聞いて来た。

「うん、行ったね。小学校の時ではしれなかった暦のこととか知れて良い旅行だったよ。まあ、いろいろあったけど」

「いろいろ……！？暦のこと……知る……！？ねえ！何で誘ってくれなかったの？サークルの活動でしょ？」

声大きい。

そんなに声をはらなくても聞こえてるよ。
というか

「え、暦もいるのに旅行行く気だったの？」

「いや、行かないけどさ」

なんでやねん！

めんどくさっ！

なら、言わなくていいんじゃないの！？

打てば響くタイミングで返してきた。

少し面倒臭い性格も、暦と似ているかもしれない。

ひょっとして2人は同族嫌悪か何かなのかもしれないな。

「私としてはね、一回聞いてからにして欲しかったってことよ。暦が行くなら行かないけれど、確認もなしに行ってしまうのはどうなのよって言うこと！」

「あーはいはい。分かりました。以後気をつけますよ」

「でっ」

今度は急に小声になって聞いて来た。

何のことだ？

「で、とは？」

「だから……その……ん……アレよ」

しずかは何か言いにくそうにしている。

「アレって?」

「あーもう、分かれ!」

急に声が大きくなる。

「なにがさ」

「だから、暦と2人だったんでしょ? なにか、こつ　過ち的な? やってないでしょうね?」

しずかがかなり食い気味で聞いて来た。

テーブルを挟んで向かい側に居るにもかかわらず顔がかなり近くにある。

そんなに身を乗り出さないでも……。

っていうか過ちって……。

そんなに信用ないですか?

「ないよ」

「本当に?」

「ある訳ないでしょうが」

「……ならいいけどさ」

ようやくしずかは静かになった。

……別に洒落じゃないけどさ。

そういえば、こんな話を聞いたことがある。

人の名前は本人の性格と反対を表すらしい。

なぜなら、親が自分の性格を嫌っていた場合、子供にはそうなる欲しくなくて、自分の性格とは逆の名前を付けるから。

例えば、親が落ち着きがなくて、声が大い人だった場合、「しずか」という名前を子供に付ける。

でも、遺伝によってある程度子供の性格は親に似てしまう。

だから「しずか」という名前の人に、静かな人はいないのかもしれない。

僕はそんなことを思った。

と、ここで、

「あ、ちょっとお花を摘みに・・・」

年寄り臭い言い回しをしてしずかはトイレへ。

「おっさんか」

「せめてオバサンって言って!？」

そして、数分で返って来た。

「あ、飲み物買ってきたけど飲む?お茶だけど」

「飲む。コップに入れてくれると嬉しい」

「分かった・・・はい」

「ん、ありがとう」

コップを受け取った僕は、受け取ったコップをテーブルに置き、

曆に、

「ところでせ」

と、曆相手では出来ない、ささやかな仕返しを試みる。

「過ちつて具体的にどんなことをするの？」

僕は知っている。

しずかはその手の話題を最も苦手としていることを！

曆は好きだけど。

旅行中も何回か言っていたし。

「え・・・？」

頭から湯気が出るんじゃないかと言う古典的表現を使うしかないくらい顔が真っ赤になって来た。

「ちょ、いきなり何言つのよー！」

スダン。バキン。ジリリリリリリ・・・。

何が起こったかと言うと、しずかが照れにより、上へ向けてガスガンを発砲。

どうやら、発砲するのは怒ったときだけではないようだ。危険度が増した。

そして弾は秒速100mで飛び出し、天井に向けて発砲したため消防法により設置していた火災警報装置に命中。

そして、火災警報装置が壊れて鳴っている、という状況だ。

「なにをやっているんだよ！」

「だって、しょうがないじゃない！反射的に撃っちゃうんだから！」

「原生動物じゃないんだから、頭で考えてから行動して！」

さりげなく罵倒する。

最近、曆に罵倒され続けていた反動だ。

と、

ツパーン！

「「え？」」

ドアの向こうの廊下から破裂音が聞こえて来た。

最近、聞いたことのあるような音だ。

僕とせずかは言い争いをやめて黙って顔を見合わせる。

そして、アイコンタクト？をとり、その結果、僕は様子を見に廊下へ出ることに。

恐る恐るドアを開けるためにドアノブを握ると

「あっち！なにこれ熱いよ！」

触って居られない程、ドアノブの金属部分は熱くなっていた。

僕は近くにあったタオルをドアノブに巻いてドアを開ける。

すると、目の前には

「「「「「「「「」」」」」」」」

火柱が轟々と上っていた。

僕と奥にいたしずかはそれを確認すると無言になった。
そして、先に僕は言う。

「火災警報、特に問題にはなりそうにないね……。よかったよ
かった……」

しずかは、

「本当によかったよね！むしろ良い事をしたぐらいだよ！あっは
は……」

「……」

「火事だ　！！！」

大変な事になった……。

第5話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい（part

ども、よねたにです。

第5話、C棟火災編のpart1です。

未だにつたない文章ですが読んでいただければ幸いです。

では、また。

第6話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい（part

現在の状況を説明します。

今、僕としずかがいるのは部室が集まる6階建て「C棟」の5階の趣味研究会の部室内です。

ドアを開けると火柱があります。

部室の火災警報機が鳴っています。

1階から4階までと6階のようすは火柱がドアの前にあるので確認できません。

夏休み中なので、大学内にもこの「C棟」にもほとんど人はいません。

「どうしたらいいんだ！」

「消防に連絡したら？」

「それだ！」

僕の絶体絶命の叫びに、女神 には見えないな、しずかが答えた。

どうしてこんな簡単な事に気が付かなかったのだろうか。

さっきの情報番組でも言っていたじゃないか！

日本の消防は優秀だと！

僕はポケットから今流行のスマートフォンを取り出す。
が

「あつちよっ

」

ガシャン

落とした。

落としてしまった。

しかも、画面の方から落ちた。

僕は慌てて拾う。

「……」

画面には蜘蛛の巣が張っていた。

もう操作できない。

が、まだ希望はある。

その希望へ僕は目を向ける。

「しずか、携帯貸して！早く！」

「あー私の家近いの」

「だから？」

「持って来てない？」

「じゃあ携帯化して」

「自分で何言っているか分かってる？」

僕は、一体、どうしたら、いいんだ！

いや、慌ててはいけない。

冷静な判断が出来なくなる。

落ち付け落ち付け……。

……よし。

落ち着いた。

「そういえば、しずかは随分落ち着いているけれど、何か策でもあるの？」

落ち着いたら気付いた。

しずかはいつもどおりだった。

ただ、火事場では異様に見える。

余程の策があるのだろう。

僕は期待して答えを待つ。

「いや、何も出来ないから落ち着いているだけー」

ただの諦めた人だった。

「そうですか……。ん？スプリンクラーとかって作動していないのかな」

消防法とかで付けないといけないんじゃないか？
だったらあるはずだけれど。

「さっきドア開けたとき、出てなかったね」

そう、ドアを開けたら火柱があった。

とうか火柱しか見えなかった。

ここは神社か！

「でも付いているはず」

僕は言う。

付いていないと困るから！

「壊れたのかもね」

もしそうなら最悪の事態だ。

「壊れるものなのかどうか」

いざって時の為のものなのに、いざって時壊れていたら本末転倒
だろう。

「じゃあ、どうしてなのかしらね」

僕は考える。

例えば、また僕的能力がらみで とか？

謎の組織が僕を追って来て、スプリンクラーを壊して火事にして殺
そうとしているとか？

・・・ないか！

ないないないない！

「わからない」

と、言うておこづ。

その時、僕は閃いた。

こういう閃きは脳に良いらしい。

「スプリンクラーが付いているなら衝撃とか与えれば作動するんじゃないかな。例えばしずかのガスガンとか」

とりあえず、提案してみる。

「あ、それはいけるかもしれない！テレビとかでも、スプリンクラーに物ぶつけて水浸し、とか見たことあるから」

「まずはドアの前の火柱を消そう。僕がドアを開けるから、しずかはスプリンクラーを見つけて撃っちゃって」

「OK」

「じゃあ、行くよ・・・3・・・2・・・1・・・」

そしてドアを開ける。

物凄い熱が感じられる。

長い間開けていられない。

と、

ズダン・・・ピシャー・・・

火柱がみるみる消えて行く。

しずかを見る。

手にはガスガンが握られている。

どうやら作戦成功のようだ。

「とりあえず延命できそうね」

しずかがガスガンをガンベルトにしまいながら言う。

その姿が随分と様になっていた。

「そうだね。それにしてもよくあの火柱の中スプリンクラー見つけられたね」

「まあね。伊達にサバイバルゲームやってないから」

それがまさかこんなところで役に立つとはサバゲー仲間も思いも
しないだろう。

そもそも、いくら趣味がサバゲーだからと言ってガンベルトしてガ
スガン持ち歩いている人なんているのだろうか？
今更おかしい事に気が付く僕も僕だけけれど。

「それに」

と、しずかが溜めを作る。

「リアルなサバゲーで今の状況楽しいしね？」

バトルジャンキーか！

僕達は行く先々の火柱や火の海をスプリンクラーをガスガンで撃
つて消火していく。

そして、とりあえず階段までたどり着くことが出来た。

「ここからが問題か」

そう、ここから下も火の海だった場合、しずかのガスガンだけで
は乗り切れないかもしれないのだ。
なぜなら

「うん。あと撃って数発ってところだね」

しずかのガスガンはハンドガンのタイプで、改造してあり射出速度は秒速100mにもなる。

となると、1発に使用するガスの量も半端な量ではない。

小さいハンドガンのタイプでは入れられるガスの量も少なく、多くの弾数は撃てないのだ。

「今日はガスとか持って来てないんだよねー。弾は普通のBB弾と鉄製のBB弾持って来てるんだけどね」

「鉄製のBB弾ってどういうこと？」

「普通のBB弾はプラスチック製で質量が軽いから空気抵抗とかあって遠くまでは飛ばないんだよね。そこで、鉄製の質量のあるBB弾を使えば、速さそのまままで遠くまで飛ばし威力も倍以上になるって訳！」

「危なっ！」

「いやいや、使っていないから安心していいよー」

「できないよ・・・」

「って、こんな話をしている場合じゃないでしょ？」

「誰のせいだ、誰の・・・そういえば、わざわざ建物内の階段を使わないでも、外に階段なかった？非常用の」

僕は思い出した。

外付けで階段があったことを。

「あー・・・あったね、そんなものも」

「しずかも今まで気が付かなかったらしい。」

「そっち使わない？」

「そうだね。そっち使おう」

その後、僕達は非常階段を見つけ、無事に外まで脱出することが出来た。

そして、中の階段を使わなかったことを本当に良かったと実感した。

「うわー・・・」

これは僕の声。

「これは夕方のニュースレベルだね」

これはしずかの声。

僕達が外へ出ると、C棟は火に包まれていた。

C棟周辺には夏休みにも関わらず、大学に来ていたらしい学生がちらほら見られる。

そして、C棟内にいたと思われる、ところどころすすけた学生も数名いた。

周りには火事特有の異臭がたちこめ、ハンカチなどで鼻を覆っていないと臭くてその場にいられない状況だった。

「ん？」

僕はその異臭の中に知っている臭いを感じた。

「この臭いは・・・灯油か・・・ガソリンか？」

ガソリンスタンドなどで嗅いだ事のある臭いだ。
かすかだが臭いがする。

しずかの方を見る。

「え？」

しずかが泣いている・・・？

そういうキャラではないと思っていただけ・・・。

まあ、一応女の子だし、そういうこともあるのか？

それにしても　と思う。

「まさか・・・」

放火か？

もしもこの火事に灯油かガソリンが使われていたとしたら、十中八九放火だろう。

すると、この火事は僕の能力がらみか？

京都では僕の能力を利用しようとする人がいたが、今回は僕を殺そうと・・・？

僕は、燃え続ける棟の前に、そんなことを思っていた。

数時間後。

誰かが呼んだ消防により、なんとか消火された。風の噂によると、放火の線が濃厚らしい。

消防の人が言っていたならほぼ間違いないだろう。

そして、恐らく犯人は僕を狙った。

なぜなら、出火場所が5階の趣味研究会の前だったから。

「ふーむ・・・」

僕は今、消防の目を盗んでその5階の趣味研究会部室内に1人である。

ちなみにしずかは帰った。

そしてあのときは動転していて気が付かなかったが、今となってみれば灯油のような臭いがするのが解る。

やはり

「僕が目当てか・・・」

そう考えるのが妥当だろう。

となると、僕がまだ生きていくなれば、また狙って来るか・・・。

僕は窓へ向かう。

ドロドロに溶けていて外が見えない。

その窓をなんとかこじ開ける。

新鮮な空気が部室内 いや、元部室内に入る。

「全く、面倒な事になった・・・」

そんな誰かに聞かれたら恥ずかしいような独り言をつぶやくと

「どんな面倒な事になったのかしら、久寿米木くん」

後ろから聞き慣れたクールボイスが。

僕は慌てて振り向く。

そこには、暦の姿があった。

「え、こ、暦！？なんでいるの？帰ってくるの明日じゃなかった？」

「いえ、沖縄行ったはいいのだけれど、お葬式終わった後だったのよ。両親が日にち間違えてしまったみたいだね。なので、1日観光してから帰って来たわ」

なんて失礼な事を……。

暦の親らしいと言えばらしいけれどさ。

「あーでもそういうのってあるよね。僕の友達もさ、彼女と喧嘩して、彼女が実家のある大阪に帰っちゃって。で、その友達が慌てて大阪まで行ったんだけど、彼女の家が何処にあるか分からなくて、観光して帰って来たんだよ。それって、こついうことだよな？」

「全く違うわよ」

一蹴された。

「え？あ、そう」

「そんなことより、久寿米木くん。この状況どういうことかしら。説明してくれるとありがたいのだけれど」

「あ、そうだよ。実は」

僕は火事について粗方を説明した。
今日の昼過ぎに火事が発生したこと。
僕としずかがこの部室にいたこと。
ガスガンでスプリンクラーを作動させながら脱出したこと。
そして

「火元がこの部室の前だったんだよ」

僕がもっとも気になっている点を言う。

「それはおかしいわね」

暦も僕と同意見らしい。

「普通なら1階とか外の壁とかが火元よね」

「そうだね」

「ということは 外部犯ではなく内部犯ということなのかしら」

やはりそういうことなのか？

「・・・考えたくはないけど」

しかし、出火当時このC棟にはほとんど人はいなかったはずだ。
僕はこっそり監視カメラの映像を拝借し、C棟内には僕としずかと
数人の学生、それから掃除のおばさんだけで不審人物はいなかった
ことを確認した。

「私、思っただけねど」

そう前置きをして暦は言う。

「犯人は雨倉さんなのではないかしら」

「まさか」

そんなはずはない・・・と思いたい。

「では、出火推定時刻の前に雨倉さんは部屋を出たりしていないのかしら」

僕は思い出す。

そういえば

「・・・いや、一回お花を摘みに」

「は？」

「いや、トイレに行った。で、そのついでだって言ってお茶を買ってきてくれた」

「アリバイはないわね」

アリバイはない。
けれど

「でも、動機がない」

「私達だつて、いつも一緒にいる訳ではないのだから、彼女について知らない部分だつてあるでしょう」

「まあ、そうだけど・・・」

「とりあえず、雨倉さん呼びましょう。話はそれからだわ。彼女は今どこにいるのかしら」

暦が僕に確認する。

「家に帰っているはずだけど？」

「え、さつき大学内で見かけたのだけれど？」

「そんなはずは」

しずかは消火活動中に帰ると言つて家へ帰つたはずだ。僕はとりあえず、開いている窓から外を見る。すると、

「え・・・」

しずかがいた。

大学の外へ向かつて歩いている。これから帰るようだ。

そして、ここからでは表情はみえないが、どことなく暗い。いつものしずかではないように見える。とりあえず

「しずかと話してみるか」

僕達は棟を出て、しずかの元へ足を急がせた。

「しずか!」

僕達は校門を出ようとしていたしずかを呼びとめる。
すると、

「!」

こよみは驚いたように身体を震わせ、急に駆け出す。

「え、なんで逃げるの!」

「あら、やっぱり犯人だったのかしらね」

「本当にしずかが」

とにかく今はそんなことを考えている場合ではない。
しずかを追わないと。

僕達はしずかの後を追う。

「ちょっと、しずかストップ!止まって!」

僕は一生懸命走る。

後ろから、

「久寿米木くんはいつも一生懸命ね」

暦がやるきなさそうについて来る。

格闘技が半端なく強いだけあって、男の僕にも難なく走って付いてくる。

「いいから来ないで！」

前ではしずかがそう叫びながら逃げる。
そして

ズダン。カキン。

「これ以上追って来るなら撃つよ！」

「撃つてから言っな！」

しずかは走りながら発砲してきた。

コンクリが少し削れていた。

今のは普通のBB弾じゃなくて金属製の方じゃなかった？

危なっ！

と、しずかが発砲するため後ろを見ながら全力疾走していたため、前にあった電柱に気が付かず正面からぶつかった。

「ぐふっ」

ボタン。

しずかが崩れた。

崩れたことでようやくしずかが止まった。
僕達はようやくしずかに追いつく。

「ちよ、しずか大丈夫？」

近づきながら僕は聞く。

暦はなんか笑っている。

小声で「無様だわ」とか言ってる。
しかも笑顔で。

「……ううう……もう、嫌だ！助けて、春希！」

しずかは泣きながらそう言った。

そして、

「傑作ね」

暦は笑いながらそう言った。

周りの目が、とても痛い。

そう、ここはいつのまにか駅だった。

「しずか、落ち着いた？」

「うん……」

駅での周りの目が痛かったため、僕達は急いでその場を退散し、駅から少し離れた住宅街の中にある喫茶店に場所を移した。

ちなみに喫茶店の名前は「喫茶ブラジル」。

薄暗い照明の店内に、南国風の観葉植物が印象的だ。

僕達はコーヒートを3つ頼んで、僕と暦が隣で、向かい側にしずかを座らせた。

「それで」

と、暦が聞く。

「雨倉さん、あなたがやったのかしら。あの火事は」

ズバリと言った。

もう少し遠回りに聞いたらどうなの？
気を使ってさ。

「……ごめんなさい」

しずかは認めた。

自らがあの火事を引き起こしたことを。

「よくも私の城を燃やしてくれたわね。死刑に値す」

「ちょーっと暦、黙っててくれると嬉しいなー？」

言葉攻めで自殺に追い込む勢いの暦を黙らせて、僕が聞く。

「えっと、僕達が呼びとめたのに逃げたのは、それが原因？」

「……うん」

「どうして？どうして、あんなことを？」

僕は動機を聞いた、

どうしても動機だけが解らなかった。

おそらく火を付けたのは、お花を摘みに
もといトイレへ立っ
た時だろう。

それくらいの時間はあった。

「……」

「言えない？」

言えない？

どういうことだろう。

僕は考える。

そつえば、電柱にぶつかつた直後言っていたな。
聞き流しちゃつたけどさ。

確か 「助けて」だっけ。

「助けて」？

……まさか。

いやいやいやいや。

……いや、でも。

一応聞いてみるか。

「ひょっとしてなんだけどぞ」

と、前置きをしてそつと尋ねる。

「誰かに脅されたりした？」

そう聞くと

「!」

しずかの身体が震える。

「正解か」

「・・・うん」

しずかは誰かに脅されてこの火事を引き起こしたことを認めたと、

「久寿米木くん、そろそろ喋ってもいいかしら。別に自殺に追い込んだりしないから」

「分かった。言葉攻めはしないでくれるとありがたい」

「分かったわ。気を付けることを考えておきましょう」

もうちよつとしつかり考えてくれるとうれしいな！。

まあ、言わないけどさ。

「雨倉さんは、つまり、誰かに頼まれて放火したのよね。火を付けたのはトイレに立った時かしら。では、その誰かとはいつ会って脅されたのかしら」

「暦がまともな事を聞く。」

いつもがこれならいいんだけど。

「脅されたのはトイレに行って、帰ってくるとき。春希を殺せって2人組の大きい男の人に言われたわ。一応、私も持っていたガスガンで攻撃しようとしたけど、近接戦だったから難しくって……」

「なぜ、放火だったのかしら。その2人組の大男が久寿米木くんを帰り道なりで殺せば簡単だったのではないかしら」

殺せばって。

暦は僕に死んでほしいのか？
そんなことないと思いたい。

「私も言ったわ。殺したいのならあなた達が殺せばいいって。私は殺したくないって。そしたら、大男の内の1人が電話をして……。その電話を私に渡してきたの。そうしたら、電話から……。誰か分からないけど、「助けて、殺さないで」って声が聞こえて来たの。それで大男の1人が、「お前が久寿米木を殺せばこいつを助けてやる」って言って……。」

人質か。

「だから、逆らえなくて……。でも、直接は殺せないって言ったら、じゃあ火をつけて殺せって言われて」

「それで、放火をしたのね」

「うん。それと、春希にお茶を渡したじゃない？」

僕に話が振られる。

「あーうん。貰った貰った」

「実はアレには睡眠薬が入っていたの。春希が苦しまずに且つ確実に殺せるようになって」

「！」

「うわー！

危なかったー！

飲まなくてよかったー！

「私も、春希が飲んだら飲もうと思っていただけ・・・私のせいで春希が死ぬのは嫌だったから。でも春希は飲まなくて。で、あとは」

なるほど。

そんな裏話があったのか。

全くもって気が付かなかった。

それにしても、大男2人組か・・・。

監視カメラに映っていなかったけれど、一体どこから入ったのか・・・。

いや、監視カメラと言っても1台だけで甘いセキュリティだったから死角を突けば入れるか。

「でも、なかなか侮れないかもしれないわね、その大男達」

暦が言う。

「だって、自らの手を汚そうとしないあたり、その辺の殺人犯なん

かよりよっぽど頭が良いわよね。ひょっとしたら組織的な犯罪なのかもしれないわね」

確かにそうだ。

普通ならその大男達で片づければいい。

でも、そうしなかった。

出来るだけ自分の手を汚さないで計画を遂行する。

厄介だな。

そんなことを考えていると、しずかが言った。

「そういえば、話し声からなんだけど、上司みたいな人がいるってことを聞いたわ」

組織的犯罪か。

「それから」

しずかは僕の間を見て言った。
なにになになになに!?

「明日の22時、春希の家を襲うって言っていたわ」

うわー……。

やだー……。

……本当に。

第6話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part

ども、よねたにです。

連絡事項です。

掲載ペースですが、毎日で行けるかな、と思っていたのですが意外と難しく……。

なので、次回は11月20日を予定しております。

では、また。

第7話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part

予定より早く出来たので、早めに投稿しました。

この感じでは不定期更新になりそうです。

第7話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい（part

8月13日。

しずかが訳あってC棟を全焼させる放火事件を引き起こした翌日。
時刻は19時。

僕は家（一軒家）にいる。

そして、なぜか僕の家には暦がいる。
来たのはついさっきだ。

現在の構図は、リビングのテーブルに僕、僕の向かいに暦。
ちなみに僕の家族は念のためを取って、外出させている。

「さて、久寿米木くん」

席についてそうそう、暦が言う。

「かなり驚いていたようだけれど、私達が来ないとも思っていた
のかしら」

そうだよ。

普通、これから襲われるって分かっている家に誰が好きこんで行く
んだよ。

「まあ・・・」

なんとなく、言葉を濁す。

「心外ね。私達はそれほど冷たい人間ではないわよ」

そうですか。

・・・ん？

さつきから「私達」って言っていないかな？

「そういえば、しずかはどうしているのかな」

「この家の警備を任せてあるわ。少し離れた所から、スナイパー
イフルで狙わせているの。誰か着たら知らせて、不審な動きをする
ようなら撃って良しと言ってあるわ」

本格的過ぎる！

どこの大臣の家だよ。

なにも、そこまでしなくても・・・。

「やりすぎじゃあないかな」

「そんなことはないわよ。だって相手は組織的犯罪者なのよ。それ
に、放火の可能性も否定できないわ。警備させておいて、損はない
わ」

なるほど。

僕はてつきり、殴りこんでくるかと思っていたけれど、家を燃やさ
れる可能性もある訳か。

あまり、派手な事が好きそうでない犯人のようだから、そういう可
能性を消してしまっていた。

それにしても

「よく、しずかが暦の言うことを聞いているね」

物凄い疑問だ。

暦が部室にいたらしずかは顔を出さない、逆もまたしかり。

そんな関係なのに。
それほど嫌っているのに。

「まあ、そこは交渉術よ。「あなたが私の城を消し炭にしてしまったのだから責任をとりなさい。さもなければ、あなたの大事にしているエアガン、ガスガンを消し炭にしてもかまわないのだけれど」と言ったら快く警備をしてくれたわ。意外と扱いやすい。ではなく、素直な子で良かったわ」

それは交渉とは呼ばないよ、曆さん。
脅迫と呼ぶんだよ……。

この件が片付いたら、しずかにお礼を言っておかなければ。

「久寿米木くん、こんなときなのだからもっと有意義な話をしましょう。作戦とか立ててみましょうか？」

「あーいいかもね」

「久寿米木くんは何か考えがあるのかしら。私達が来る前まで、何もせずに家にいた訳でしょう」

「ん……作戦とまでは言えないんだけどね。しずかが犯人達が大男だつて言っていたじゃない。だから、場合によっては戦闘とかになると思ってたんだよ」

「ない話ではないわね」

「だから、そうなった時は、能力を使って　　って思ってたんだけれど」

僕の未来を見る能力を使えば、相手がこれからどう動くか仕掛けてくるかが解る。

そのため、攻撃をかわすことは造作でも無い。

ただ、戦闘でこの能力を使うのは負担が大きい。

例えば、犯人が目の前において僕がそこで未来を見たとしても。

その未来が、犯人に攻撃される僕が、何回か避けた末に殴られるというものだった。

その未来を見た僕は、殴られないために、殴られるはずだった攻撃を避けたとしよう。

本来あるべき未来が変わってしまった事になる。

そうしたら、さっき見た未来はもう当てにはならない。

だからもう1度、攻撃を避けるために未来を見なければならなくなる。

そして、未来を見るには代償がある。

頭痛と倦怠感、そして命を削るといふ代償が。

未来を見ると言っても意外と万能ではないものさ。

まあ、この例えでは「避ける」場合で話したけれど、それを「避けながら攻撃」に変えてもいいしね。

もしそれで、1撃で相手を行動不能に出来れば、能力を多用しなくても済む。

「・・・私はあまり賛成できないわね。だって、久寿米木くんにいろいろと負担があるのではないのかしら」

曆は未来を見ることに対する代償を、京都旅行の時に知っているからね。

賛成されない事は分かっていた。

「まあ、あるはあるけれど、状況が状況だから仕方がないかなって」

僕の命が掛っているしね。

こういう場合はしょうがないんじゃないかな？

「でも、出来るだけ使わないと約束して」

「もちろん、使わない事に越したことはないからね。それは約束する」

「分かったわ。では指切りでもしましょうか」

「僕を子供扱いするな。それから、もし使ったら本当に針千本飲まされそうで怖すぎるから」

「そんな面倒な事しないわよ。それに、針千本って意外とお金がかかるものよ」

飲まされない理由が経済的理由だった。

なにこの現実味あふれる感じ……。

「でも、どうする？ 暦が強いと言っても2人同時に相手できるかどうか」

「一般人レベルなら対応できるでしょうけれど、さすがに戦闘の口とか、そういうレベルになると難しいでしょうね」

さて、どうしたものだろうか……。

2時間30分後。

現在の時刻は21:30。

襲撃予定時刻の30分前だ。

「さて久寿米木くん、もうそろそろこの家が戦場になるのだけれど。大丈夫かしらね」

「まあ、なんとかなるんじゃない？殺されない程度には頑張るよ」

楽観的だなーと自分でも思う。

「殺されない程度、ね。・・・そう。・・・久寿米木くん」

と、トーンを変えて暦は言う。

「何かな」

「問題です。死体と遺体がありました。どちらが男でどちらが女でしょうか」

クイズ？

なぞなぞ？

この局面で!？

「え、なんで急」

「どちらがどちらでしょうか」

うわ、凄い圧力を感じる!

中世ヨーロッパの貴族の圧政並の圧力だよ。
よく知らないけどさ……。

「えーと……」

全く分からない。

死体と遺体に違いなんてあるのか？

あー適当でいいかな？

「死体が女で遺体が男……とか？」

僕が答えると

「ぶー。残念。不正解です」

物凄くいやらしい笑みを唇が浮かべる。

うわー答えの理由聞きたくないなー。

でも聞かないとなんかモヤモヤするし。

「……ちなみにだけど、なんで？」

「男は「したい」、女は「いたい（痛い）」、よ

下ネタかい！

「お気に召したかしら、この問題は」

どんな反応をしていいかわからないよ！

情緒不安定だよ！

「じゃあ、僕も問題を・・・」

「あら、そう」

「アルジェリアにあつてナイジェリアにない物はなーんだ」

「・・・」

リビングを沈黙が支配する。

いや、征服と言った方が良くもしれない。

「久寿米木くん」

「はい」

「私の問題と比べても、その問題、どうかと思つけれど」

「うわー！」

外した！

僕のとつておきの問題だったのに！

「とまあ、これくらいにしておきましょうか。そろそろ時間よ。それに久寿米木くんの緊張も大分解れたみたいだし」

「そうか。」

僕は緊張していたのか。

一応表情とか言葉とかに出さないようにはしていたけれど、気付か
れていたのか。
なるほど。

曆らしい解し方だ。

下ネタだったけれどさ。

「ありがとう」

僕は言う。

「あら、何のことかしら」

一応伝わったかな？

恰好を付けたがる暦はとぼけたけれどさ。

さて、時間か。

僕は時計を確認する。

21:50。

予告時間まであと10分。
と、

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。

この時間に来客か？

そう思ったとき、暦の携帯に着信があった。

暦は僕にも聞こえるように、スピーカーにして電話を受ける。
電話の相手はしずかだった。

「もしもし」

『もしもし、私だけど』

「今、チャイムが鳴ったのだけれど。その件かしら」

『察しが早くて助かるわ。私が出た大男じゃないんだけど、ちょっと怪しい2人組が玄関前に来ているのよね』

十中八九、だろう。

「分かったわ。私達が外へ出て対応するから、そのままいつでも狙撃できるようにしておいて頂戴」

『了解。・・・まったくなんで私があいつの命令に従わ』

ぶつ。ぶーぶーぶー。

「雨倉さんには再度調教が必要ね」

意外と仲良くなったのかなーとか思った僕が馬鹿だった。さて。

作戦なのだが。

いくら暦が強くても、相手が戦闘のプロだった場合対応できないので、僕達が外へ出ることでいざとなったらしずかの遠距離からの援護をもらおう、と言っただけ。

こうすることで、しずかだけが闘っても一応対応は出来るし、僕の家への被害も少なくて済む。

もちろん、本当にピンチの時は僕も加勢するけれど。

「それにしても、敵ながら10分前行動とは良い心がけね」

「いや、襲撃の時間が早くなったただけだから。むしろ悪いことだからね!？」

「行きましょう」

「僕のツツコミに対する一言とかないの!？」

緊張感が一切なくなった僕達は、敵を出迎えに行った。

玄関の門の前には、若い男と、中年の男がいた。

2人ともスーツを着ていて、一見会社員のように見える。

若い男の方は

短髪黒髪で、スポーツマンといった感じだ。

対して中年の男の方は、頭が少し禿げていて、苦労しているんだろ
うなーという感じだ。

その2人を見た暦は、

「あら、大分想像とは違うわね。もっとむさ苦しい人たちが来るか
と黙っていたわ」

確かに。

僕達が想像していたものとはかなり違った。

すると、中年の男が口を開く。

ファーストコンタクトだ。

「おや、我々が来るのを事前に知っていたような口ぶりですね。ど
う思いますか、森さん」

「どうやら短髪黒髪のスポーツマン風の男は「森」という名前のようだ。」

「そうですね、彼が未来でも見ていたのでしょうか」

「それは違うと思いますよ。なぜなら我々の風貌が想像と違うと先ほど言っていました。想像は想像でしかありませんでしょう」

「なるほど」

2人は何故僕達が事前に知っていたかに興味があるようだ。

さて、どうするか。

・・・まあ、それくらい教えてもいいか。

僕は教えることにした。

「あなた方のお仲間が、こそこそ喋っていたのを聞いた人がいたんですよ。その人の情報です」

すると2人は驚いたような表情を作り、

「仲間、ですか？」

と、中年の男が言った。

「ええ。僕の友達にC棟　大学の部室を燃やさせた、大男の2人組です」

すると、

「ああ、あの人たちですか。彼等は仲間などではありませんよ。た

だ、雇った人達ですよ。裏の方から、ですけど。その日我々はやることがあったので」

え、そうなの？

てっきり犯罪組織か何かなのかと思っていた。と言うことは

「あなた達は組織とかで動いている訳ではないんですか？」

「そうですね」

あっさり肯定された。

と、言うことは敵はこの2人だけか。

しかも、そんなに強そうには見えない。

もしも戦闘になっても問題なさそうだ。

「ところで、今日はどういったご用件でしょうか」

暦が淡々と言う。

もうちょっと愛想を振りまけ！

っていうか、何で来たのか知っているだろう！

「簡単に申し上げるのなら、久寿米木さん、あなたに死んでもらいたく、今日は参りました」

中年の男が言う。

そして、森も追隨して言う。

「ってかさっさと死ねや」

・・・え？

さつき丁寧な言葉遣いじゃ無かったかな？

僕の聞き間違いか？

僕がフリーズしている間に暦が反撃する。

「あら、あなた随分な口を利くのね。人に頼むときはもっと誠意をこめなさい。例えば土下座とかね。まあ、土下座しか受け付けられないのだけれど。もっとも、あなたの言うこと、聞くつもりもないけれどね」

「うるせえよ」

「ベネズエラ？」

「うるせえよって言ったんだよ！」

「あら、そうなの。分からなかったわ」

「死ねや！」

「聖闘士星矢？」

「死ねやって言ったんだよ！　たく肩すかし食らった気分だぜ・・・」

「横須賀市？」

「肩すかしだ！　もう嫌だこいつ！」

さすが暦だ。

人によって態度を豹変させるらしい森を手玉にとっている！
それと、ベネズエラってどんな聞き間違いだよ！

「失礼、お嬢さん。森は人によって態度をがらりと変えてしまう所が悪い所です。申し訳ない。森も憤みなさい。久寿米木さんはある意味被害者なのですから」

中年の男が曆に謝罪する。

この人は礼儀をわきまえている分まだましだ。

そして気になることを言っていた。

僕がある意味被害者？

どういうことだろう。

「そうですね。その猿の教育をもっとした方がいいでしょうね。ところで、あなたのお名前、まだ聞いていないのですけれど。伺ってもよろしいですか」

そういえば聞いてなかった。

さつきから中年の男中年の男って煩わしかった。

「そうですね。2人とも自己紹介がまだでした。私の名前は、林です。で、こちらは森」

そう言って林さんは森も紹介した。

「そうですね。ご用件についてお話してもいいかしら。久寿米木くんに死んでもらいたい」と言うことらしいのだけれど、動機が解らなければ、同情すらできないわ。だから、動機くらい教えてもらいたいのだけれどいいかしら」

「分かりました。まずはこちらの事情をお話ししましょう」

「ええ。全てはそれからしましょう。お互いに」

そして、林さんは語り出した。

「あーまた僕蚊帳の外って感じだなー」

今回とか思いつきり中心人物なのに。

途中から僕喋ってないし。

主導権握っているのが曆だからしょうがないと言えはしょうがないけれどさ。

「我々は」

長くなりそうだ。

そんな気が、僕はした。

第7話 蝟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)

ども、よねたにです。

前書きのとおり事情から、早めの投稿となりました。

さて、投稿ペースについてなのですが……。

不定期になりそうです。

すみません。

感想や評価を頂ければ、参考にさせていただきますので、よろしく
お願いします。

では、また。

第8話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)

「私と森は世理教と言う宗教団体に所属しています。世理教と言うのは世の理が全てであるという考え方のものです。同時に私達はある研究所の所員でもありました。私達はそこで知り合いました。

このように私達は年が離れているのですが、話や考え方がよく会い、たびたび話す機会がありました。そして、今から数年前、世理教を知ったのです。私達はその考え方に大いに共感し、すぐに入信しました。まだ新興宗教だった当時の世理教には、信者が少なかつたため私と森はすぐに幹部に迎えられました。しかし、数ヶ月前、研究所である情報を耳にしました。未来を見ることが出来る者がいる

と。未来を見る。そんなことは世理教から見れば在ってはならない事です。そして、私は研究所でもある程度の地位にいる人間なので、その能力をどうするつもりかという話を聞くことが出来ました。そうしたら、未来を見て、未来のテクノロジーを入手すると言うのです。この世の理を逸脱した行為です。その為、我々は決心しました。研究所を潰し、未来を見ることが出来るという人間を消そうと」

現在の状況を説明します。

僕を殺そうとしている人達 中年の男、林さんとスポーツマン風の男、森が門を隔てて僕と暦の前にいます。

門と言うのも、今僕達は僕の家のお玄関前でこんな重い話をしているからで……。

で、話は戻って。

つまり、宗教上の理由から僕を殺そうとしている訳か。随分とその宗教とやらに入れ込んでいるものだなー。

僕は無理だ。

それにしても、研究所を潰す？

「研究所を潰す　　と言うのは？」

僕は疑問に思った事を聞いてみた。

「我々が働いている　　いや、もう働いていた、ですか。この世の理を越えたことをしようとしていたのです。我々が燃やしましたよ。全て」

「なっ　　！」

燃やした？

そんな短絡的な！

世理教、危険思想すぎる！

そういえば、研究所で僕の事を聞いたっていう話はどこかで聞いたことがある。

・・・京都か。

京都で中井玲さんが言っていたんだ。

まさか、同じ研究所ってことはないよね？

・・・こんな状況だけど、一応電話で聞いてみるかな。

「あー・・・ちよっと電話していいですか？」

駄目だよね、普通。

なのでだめもとで聞いてみた。

「いいですよ」

いいの！？

「今回、あなたは一種の被害者の様なものですから。それくらいは

自由にしていますよ。今日が久寿米木さんの最後の日ですから」

最後つて……。

「まあ、どうも」

僕は京都へ行った際、ちやっかり手に入れていた玲さんの電話番号へ電話をかける。

「あら、久寿米木くん。女の子に興味なさそうな顔をしていながらちやっかりしているのね」

暦がじと目で僕を見る。

別にそんなつもりじゃなかったんだけどなー。

ただ、アフターサービスの意味でさ？
パソコンみたいに。

24時間365日、何かあったらどうぞつて。

とか、思っていたら電話がつかがる。

「あ、もしもし。お久しぶりです。久寿米木です」

『あ、久寿米木さん？お久しぶり。こんな時間にどうかしました？』

鈴が転がるような凜とした声が電話から聞こえてくる。
玲さんだ。

「いえ、ちょっと気になることがあって。玲さん、研究所に勤めているって言うていたじゃないですか。その研究所、なにか変わった事ありませんでした？」

単刀直入に聞いた。

積もる話もあるけれど、今はそんな場合じゃない。

『変わったことと言うかなんというか・・・なくなっちゃいました、研究所。全焼です』

「え、燃えちゃったんですか！？いつ？」

『昨日です。なんでも、最初は事故か何かかと思われていたんですけれど、よく調べてみるとそういう仕掛けがしてあったらしくて・・・犯人はまだ捕まっていないんですよ。でも、夜遅くだったので、死んだ人とかはいなかったんですけど・・・。どうしてそんなことを？何かあったんですか？』

鋭いな。

そうです。

何かあったんですよ。

というか、何かあっているんですよ、というべき？

目の前に僕を狙っている危険思想を持った人たちがいるんですよ。

とは言えず、

「いえ、美人へのアフターケアは小まめにしておくべきかと思いついて。それだけです。夜分遅くに失礼しました。では」

と、僕はとても恥ずかしい事を言って無理やり電話を切った。

あー恥ずかしい。

なんであんなことを言っちゃったんだろうか・・・。

やっぱり、事故に見せかけていたか。

自分達の手を出来る限り汚したくない性分らしいから、もしかしたらとは思っていたけれど。

でも。

どうやら事実のようだ。

研究所を燃やしたと言っていたけれど、それが事実だった。

どうやらこの人たち、本気で僕を殺しに来たらしい。

いや、死んでもらいにと言った方がいいのか。

どうやら、自ら手を下すのはあまり好まないようだし。

「どちらに電話を？」

林が聞いて来た。

こんな局面で電話だもんね。

そりゃ気になるか。

僕は玲さんに危害が及ばないようにと思い、名前を出さないように答える。

「いえ、ちょっと知り合いの美人に。どうやら、林さん達が研究所を燃やしたという話は事実のようですね」

「もちろん。この期に及んで嘘など付きませんよ」

妙に自慢気な態度が鼻につくな。

こう・・・いらつとくる。

暦をチラ見する。

暦はゲテモノでも見る様な表情だった。

僕はあそこまでの表情はしていない。
断じて。

と、僕の視線に気付いたのが気付かなかったのかは分からないが、暦が小声で話しかけて来た。

「なに、久寿米木くん。中村玲さんとこの人達、同じ研究所の勤務

だったのかしら」

暦が僕の耳元で言う。

なんか変な感じだ。

僕も小さな声で、

「うん。で、実際に燃やしたらしい。昨日だって言っていたから、多分そう。で、その時間に大男2人を僕とせずかに差し向けたんだろっね」

つまり、昨日の昼間は僕達に雇った大男を差し向けて、僕達を殺す。

しかし、林と森は研究所のある関西の方にいたから殺人は不可能。アリバイは成立。

そして昨日の夜に、研究所を仕掛けておいたもので全焼させた。が、その時2人は別の場所か何かにおいてアリバイ成立。

もっとも、こちらの事件に関しては仕掛けによるものだとバレてしまっているため、アリバイは不成立だが。

「そう」

「話はまとまりましたかな」

林が言う。

今となつては会った最初のときのような表情とは大分違う。

林はニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

「そろそろ、久寿米木さんには死んでいただきたいのですが。出来れば、自ら」

やっぱりか。

出来る限り、自分達の手を汚したくはないらしい。

「お断りします」

当然、僕は言った。

「そうですか。では仕方ありません。・・・森さん」

そういつて林は森に声をかける。

「はい」

「殺して下さい」

「分かりました」

なるほど。

最初から薄々感じていたけれど、林がブレーンで森が実働か。

森が一步前へ出る。
すると

「暦・・・」

暦が僕の前へ出る。

「任せなさい。問題ないわ」

問題ないわと言われても・・・。

全く、女の子に守ってもらうとか格好悪いなー僕。

「ダメそうなら早めに言っで。そうなら僕が」

僕が能力で、と言おうとしたら 口を塞がれた。

「!?!」

僕の口を、曆の口で。

唇と唇が触れあっている。

これは キス？

なにこれ！

どういうこと!?!

そして、僕の唇から離れた曆は口を開く。

「問題ないと言ったはずよ、久寿米木くん。それから今まで言っでいなかっただけね」

「・・・」

「私はあなたのことが好きよ。あなたが死んだらそのあとを追えるくらいにね」

そう言っで曆は笑った。

今までに見たことのないような、女の子らしい笑顔で。

これは 告白、か!?!

重い想いだ・・・。

かと言っで別に嫌な気分ではないけれど。

むしろ!?!。

僕が何も言えずにいると、曆は門を開けて道路へ出る。

「おやおや、あなたが闘うんですか？お話にもなりませんね」

林が言う。

キスについて触れてこないあたりはありがたい。

「あら、あまり舐めてもらっては困るわね。それと、闘わない人がそんなことを言っているのはとても無様よ、林さん」

確かに。

漫画なんかでもそういう奴は倒される。

しかもあつという間に。

林は、暦の言葉を聞くと表情をいやらしい笑みから憤怒の表情へと変貌させ、

「森さん、このお嬢さんも殺してもいいですよ」

森に命令した。

「分かりました」

そんなやり取りがされる中、

ブルルルルルル・・・

僕の電話が鳴った。

しずかからだった。

僕はこんな状況だけれど一応でた。

「もしも」

『なにやってんの、春希！暦とキ、キ、キスなんてして！どういうつも』

あー見られていたのか。

お恥ずかしい。

でも状況が状況だ。

そんな話をしている場合じゃない。

「暦が今から戦闘に入るから、援護をよろしく。もちろん、いざとなったら僕も出る」

ぷつ。ぷーぷーぷー。

僕はしずかの話の途中に無理やり割りこんで言いたい事だけ言って切った。

僕だって、混乱しているんだよ！

そういえば、しずかの声が電話以外からも聞こえたような……。気のせいかな。

「おい、嬢ちゃん。随分俺を甘く見ているようだが……。死ぬぞ？」

「ごめんなさい。ナメック語は嗜んでいないもので」

「日本語喋ってたんだよ！」

こんなときでも暦は暦だな。

しかし、相手の戦力が未知数なのはどうかろう。

暦には使うなと言われているけれど……。

数秒使っただけなら、寿命も数十秒から数分で済む。

ちよっと使うか。

僕はコンタクトレンズを相手にも、暦にも気付かれないように外し

た。

「っ
！」

その瞬間、頭に激痛が走る。

それと同時に未来の映像が見える。

1秒後。

僕は目を閉じた。

たった1秒、能力を使うだけで済んだ。

なぜなら、暦が 10秒で負けて、殺されてしまう未来が見えたから。

相手が強すぎた。

プロだった。

「殺し」の。

僕は

「暦」

暦を呼ぶ。

「なにかしら。これから闘うところなのだけれど」

「戻って」

「あら、心配してくれているのかしら。でも」

「戻れ」

「・・・」

曆は僕の普段使わない命令口調の言葉に驚いたようだが、そのただならぬ雰囲気を感じてくれたのか、

「しょうがないわね。久寿米木くんが言うなら」

戻ってくれた。

これで、曆が殺されるのは回避した。

そして、未来が変わった。

「おいおい、どうするんだ？久寿米木よお」

森が言った。

だから、僕は

「僕が　僕が、やるよ」

そう言って、右眼を開ける。

僕は1秒　つまり、10分間の未来を見て眼を閉じた。

どうせ反撃するんだ。

未来が変わってしまう。

だったら1秒ずつ見て行こう。

「あ？久寿米木が？それは願ってもないことだ。さっさと殺してやるよ　っらあ！」

そういつた森はいきなり僕に攻撃を仕掛けて来た。

いや、いきなりではないか。

僕はこの未来を既に知っている。

森は高速で見えないと言っても過言ではないような右のストレートを僕の顔目がけて撃ってきたが、僕はそれを避ける。

「ほう、やるな！」

森は自慢のかどうかは知らないけれど、高速の右ストレートを避けられたことに驚いていた。

が、すぐに気を取り直して、左右の拳で連打を仕掛けて来る。

が、これも僕は既に見た未来だ。

避けるなんて造作もない。

僕は無駄のない動きで、全ての連打を避けきる。

森は蹴りも入れて来た。

が、そんな攻撃の種類を変えた所で僕には全く関係がない。

その攻撃も下がりながら避ける。

あー絶対明日筋肉痛だよ。

運動会の後並の超痛いヤツ。

普段運動不足の僕にこんなことをさせるな！

そんなことを考える余裕が僕にはあった。

攻撃の総数が100発を越えたあたりだろうか。

さすがの森も疲れて来たようで動きが遅くなってきた。

今がチャンスか・・・？

そう思った僕は

「とっ！」

森の顔を目がけて殴ってみる。
が、

「おっと！そう簡単にやられてたまるかよ」

いくら疲れていても、素人の拳打にはあたらなかった。

森はバックステップで軽やかに後ろに下がって間合いを取り、避け

る。

まあ、当然か。

僕も、あたるとは思っていなかった。

「久寿米木よお、お前未来でも見てるのか？」

森が聞いて来た。

「まあね。そうでもしないと、避けられないさ」

「だろうな。俺の攻撃が一発も当たらないなんて、未来でも見ていないと不可能だからな」

僕は森が話している間に、また右眼を開ける。
1秒だけ。

「
」

なるべく表情に辛さを出さないようにする。
相手にすきを見せるのと同義だからだ。

僕は1秒だけ右眼を開けて、すぐに閉じる。

10分間の未来は見た。

次で決める。

と、森が一気に間合いを詰めて来た。
速い！

が、これも既にみた未来だ。

僕はタイミングを見計らって、森が近くに来たとき
右足で森の急所 股間を蹴り上げる。

「だあああああああああ！」

森は絶叫を上げてのた打ち回った。

少し離れた所では、まさかの展開に林がおろおろしている。

そして、

「ひ、卑怯だ！股間を狙うなんて卑怯だ、久寿米木！」

と、言ってきた。

「いえいえ、卑怯ではないですよ。試合じゃないんですから、これくらい当然ですよ」

僕がそういうと、

「ええ、そうね。だからこれくらいしてもいいのかしらね」

暦が言った。

大きな石、いや岩を持って。

岩？

暦は岩を持つてのた打ち回る森へ近づぐ。

そして 岩を落とした。

森の股間に。

「ぐあああああああああああああああああ………！」

森さんは動かなくなった。

そして、股間からは赤い液体が流れている。

うわ、死んだな。

・・・男として。

再起不能だな、あれは。

っていつか僕の家の前で何をしてくれているんだよ、曆。
知らない男の股間から流れ出ている血液なんて触りたくもない。
誰が片付けるんだよ！

「な、なんてことを！」

林が言う。

僕はちよつとだけ同じことを曆に思った。
言わないけど。

林が森へ駆け寄る。

森はそれでも動かない。
まるで屍のようだ。

そんな様子を見ている僕。
と、曆は電話をかけ始めた。

「あ、私よ。そこから中年の男、見えるかしら。ええ・・・そう、
その人。その人の　　を狙撃してちょうだい。もちろん、金属製の
弾で。急いで」

その瞬間、

ズド。カラン・・・。

何かがあたつた音と、小さな金属か何かが地面に落ちた音がした。

「があああああああああああああ・・・！」

林が絶叫を上げて倒れた。

そして動かなくなった。

「これで一件落着かしらね」

僕の隣へと来た暦が言った。

意外とあっさり片付いたなー・・・。

未来を見るとかチート能力すぎる。

「とりあえず、警察呼ぶか」

「あら、いいのかしら。この人達の口から、あなたの目のことがばれてしまうのではないかしら」

「誰も信じないよ。しかもこんな危険思想の宗教の信者だから。妄想で片づけられるだろうね」

「なるほど。ちゃんと考えているのね」

僕は警察を呼んだ。

すると、数分後、パトカー数台がやって来て気絶している2人を連行した。

僕達にも警察官が事情を聞いて来たが、この2人がおかしな妄想を言掛かりにして襲ってきたと言っておいた。

警察が調べれば、林さんと森が世理教と言う危険思想の週教信者と言ったことが簡単に分かるだろう。

警察は僕達の説明に納得してあっさりと引き上げた。

「ふっ」

と、息をついた僕。

すると、隣に立っている暦が言う。

「私はもう帰ろうと思うのだけれど……。久寿米木くん、返事を聞かせてもらえるかしら」

あー……。アレか。

アレのことか。

さて、なんと答えるか？
と、

「ちよつと待ったー！！」

僕の家正面の家の庭からしずかが出て来た。そんなところに隠れていたのか。意外と近いじゃないか。

「しずか、そんなところに隠れていたのか」

「悪い！？」

「いや、別に……」

そんな大声で怒鳴らなくても……。と、

「いいわ久寿米木くん。今日は帰りましょう」

僕に返事を求めていた暦が帰る宣言をした。
なんで？

……。あー。

しずかが出て来たからか。

やっぱり仲が悪いままなのか。

「雨倉さんも今日は帰りましょう」

「え、私はまだ」

「雨倉さん」

そういつた暦は、しずかの耳元で何かをささやく。
するとしずかが、

「・・・分かったわよ。だから、私のコレクションだけはどうか・・・」

と、簡単に折れた。

大体の想像はついちゃうけどさ。

「帰りましょう」

そう言つて2人は帰って行った。

僕は、家に入った。

時間は25:00。

警察などが帰った後、15分くらいして家族が帰って来て、家の前の血痕などについて色々聞かれたがなんとかはぐらかして・・・
と言うことがあったがまあいい。

家族が寝静まつた今、僕はまだ起きていた。

ちよつと考えることがあったからだ。

森が僕を殺そうとしたとき、曆が前に出て僕の為に戦ってくれようとした。

それなのに僕は。
と、

プルルルル・・・。

僕の携帯電話が鳴った。

表示を見る。

曆からだった。

こんな時間に何だろう。

僕はそう思いつつ電話に出る。

第8話 蝋燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part

ども、よねたにです。

色々と立てこんでいたのでちょっと間があきました。

正直この蝋燭のように は自分でもどうなのか?とか思っ話ではありますが、ひとまず次の話で一区切りです。

そのあとは暫く短編みたいなことをやるつもりです。

感想や評価などよろしくお願いします。

では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3621y/>

未来探偵クスメギ

2011年11月21日23時47分発行